

---

# リリカルって.....マジで!?

グルタミン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルって……………マジで!?

### 【Nコード】

N9865N

### 【作者名】

グルタミン

### 【あらすじ】

ゼロ魔の話に行き詰まり、息抜きの書いた話。

後悔も反省もしていない。だってやりたかったんだもの!

典型的な転生をし、典型的に神様に力をもらい、典型的に原作崩壊をしていく。

ただ一つ違うのは、オリ主は自分の能力を知らなかったのです。

典型的なテンプレチートオリ主です！見たくないひとは速やかに  
お帰り下さい！

## ブログなのだろうか？（前書き）

特に有りませんがリリカル（？）な話です。よろしく願いします。

ブログなのだろうか？

ちょっとそこの君。君はテンプレかつもう飽きられつつある転生モノを信じるだろうか？

うむ、自分が何を言ってるのか、自分でもアホな話だとは思っよ。でも今俺は現実にそれを体験している。

一つ言わせて欲しい。

「オングヤアアアア！（なんじゃこりゃああああ！？）」

今俺はよく知らない女性に抱かれ、鳴いて（叫んで）いた。

#### 半日程前

何時もの様に学校から帰り、夕方の川の土手を歩いていた。

学校は家から近いので徒歩で通っていた。

何を隠そう俺は典型的な何処にでもいる高校生だ。

顔も成績も運動神経も可もなく不可もなく。

つまり何処にでもいて物語とかだと学生Aとかな奴だ。

そんな俺だが、今少し悩んで居る事がある。それは今日の学校での事だった。

休み時間の時に何気なく友達と話していた時だった。

「あ、そう言えばさ。昨日たまたまニュース見たんだけどさ、そのニュースで秋葉原の事やってたんだよね。あれ、メイドカフェってやつ？なんかさ、店に入るとメイドの恰好した女の子が『おかえりなさいませご主人様』とか言って迎えるやつ。いや俺には判んね

「わ、あれの何が良いんだか。マジでオタクって理解不能だし気持ち悪いよな」

いきなりそんな話を始めた友達Aに俺は驚いて言葉が出なかった。そう、何を隠そう俺は隠れオタクなのだ！！

「おいおい、いきなりどうした？てかそれは個人の自由だし趣味の一つだろ？そこまで毛嫌いする必要あるか？まあ理解できないのわ同じだが」

友達Bの言葉にハッと我に帰る俺。

友達Aにお前はどう思うと聞かれ、その場は適当に当たり障りの無い返事をして難をしのいだ。

そして今に戻る。しかし、そんなにオタクは駄目なのだろうか？確かに、空気を読めない奴や好き嫌い激しい奴とか多いがそれは回りが長い間オタクと言われる分類を邪険にして遠ざけて来た結果ではないだろうか？確かにオタクも合わせる努力は必要だが、それは一般人にも言えないだろうか？

そんな事を考えていた俺は、いつの間にか川沿いの土手を越え家の近くの大通りにまで来ていた。

気がつくやと信号の手前。確認すると青信号なため、俺はそのまま渡り始めた。しかし、次の瞬間突然鳴り響いたクラクションに驚き右を向くと、もう数メートルまでに近づいたトラックが急ブレーキを掛けながら迫っていた。

（あ……俺死んだ）

体は金縛りにあったように動かず、迫り来るトラックはまるでス

ローモーションの映像のようにゆっくりに感じた。  
そして次の瞬間、物凄い衝撃と何かが潰れる音と共に、俺の意識は落ちた。

S i e d ？ ？ ？

ふむ、いったいどうしたものか。困った事になった、本来は死ぬ程の事故ではなく骨折程度の事故になるはずなのだが、どこで間違ったのかその男は死んでしまった。

そう、本当にどこで間違っただろうか、自転車との接触事故がトラックに衝突される大事故に変わっていた。

まったくもって困った。こう言う仕事上の不備や事故は信用問題に繋がる。只でさえも回りから良い目では見られていないのに。

議会ではこの男を転生させる事が決まったのだが……………。

「んぐ……………が、ふが……………、ピザまん……………ピザまんが攻めて」

現在目の前で訳の判らん寝言を言っているこの男、えっと名前は……………向刀院 伸樹か。まったく暢気な男だ。

目の前で眠りこけている男について考えていると、突然後ろから話しかける者が現れた。

「何じゃ？まだ転生させてないのか」

「……………誰かと思えば、ゼウスか。何のようだ」

「いや、今度は何を企んでいるのかと思ってのう」

「何をしに来たかと思えばそんな事か、別に何も企んでなんていないさ」

「ほう、それはすまんのう。また前の男の様に物語の世界にでも飛ばすのかと思っていたのじゃが」

ふむ、企みか……それも面白いな。だがしかし、前のあいつと違ってコイツには資質が無い。このまま送っても物語に関わった瞬間に死にそう。ならば、それなりの能力を与えてみるか。

「よしゼウスお前のその話し乗ってやる、だが何か会ったとき私だけ吊し上げられるのは納得できん。そこでお前もこの男に何か能力を与える」

「ふお！？まったくお主と言う奴は……。まあよいじゃろう、わしの一言でその気を起こさせてしまったようだし。それに少しばかり面白そうだし」

それから、ゼウスとあだこうだやりながら男に能力を与えたのだが……。

「のうハデス、これはちとやり過ぎたかのう？」

「……少しどころかかなりだな」

ヤバイな、調子に乗って能力を与えすぎた。うむ、どうしたものか……。私が悩んでいるとゼウスが提案してきた。

「そうじゃ、制限をかけてみたらどうじゃろうか」



「ふむ、制限か………例えば？」

「そうじゃのう、最初から覚えているのではなく段階的に能力が開花していくようにするとか、併用して使える能力数を限定するとか、あとは組み合わせさせて使える能力を限定するとかかのう」

ふむ、良さそうだな。

「よし、それで行こう。ならば此と此を組み合わせ………」

よしできた、これでいいだろう。ふふふ、これはオマケだ。

眠っている男に手を翳し、その手が光始め、その光が男を包み始める。暫くして光は男に飲み込まれるように消えて行った。

「お主、最後に何をしたんじゃ？」

「ふふ、ちよっとしたオマケをあげただけだよ【超鈍感】と【魅了】のスキルをね」

せつかくだ、戦闘の能力だけではなんだ、こんな能力も面白いだろう。ふふふ、君がどんな事をしてくれるのか楽しみだよ、向刀院伸樹。

「おお、所でこの男はどの世界に送るんじゃ？」

「おや、まだ言っただけじゃなかったかい？この男が行くのは……。『魔法少女リリカルなのは』の世界さ」



ブローグなのだろうか？（後書き）

ブローグ的な何かでしたがどうでしたかね。まだ始まったばかりなのでどうとも言えないでしょうが。

まあこれからも応援などしてもらえたら嬉しいです、ではまた次回。

第一話なのだろうか？（前書き）

連続投稿第一話、よろしく願いします。てか話進まね〜。

## 第一話なのだろうか？

「ママ？これ何？」

「あら伸君、それはパパの大事なご本だから勝手に取ってつたらめつよ」

「うう」

はい現在絶賛赤ん坊中です、この間晴れて三歳になりました。まだ拙いですが歩く事も出来ますので、これでやっと一人でトイレに行けるようになりました。え？一歳や二歳はどうしたかって？赤ん坊の生活なんぞ聞きたいか君達は？俺は話したくない、これはかなりの羞恥刑だぞ…………マジで。

とまあそんなこんなで、今は何をしているのかと言うと、子供よりの絵本には飽きたのでテーブルに乗っていた親父の物であろう書類を読んでいた。

その書類とは『インテリジェントデバイスAIの役割と機能による利便性』

中身を読んだが……………サッパリ判らん。

まあ今のを聞いた人は判ると思うが、俺あの世界に転生したらしい、そうあの『魔法少女リリカルなのは』の世界に。

最初はマジで絶望したよ。俺の母親は魔導師らしい、と言うのも今は育児休暇的な物で休んでいるらしい。しかも管理局っぽい……………とても将来が不安です。

父親の方は技術屋でデバイスの開発や整備をしているらしい。なんでもそこそこ有名だとか。まあよくは知らないが。

とまあそんなわけではこの世界で赤ん坊をしている訳だが…

……これがかなり暇だ。ハッキリ言っただけすぎる。

なので、たまに親父やお袋の本を勝手に持ち出して張れないように隠れてたり親が居ないときなどに読んでいます。まあ最初は小説等を読んでいたんだが、つい最近はたまたまテーブルの上に置いてあった『デバイス制作の助け（初級編）』を読んでみたのだがこれがどう言う訳かスラスラ頭に入ってくる。それに内容が面白い、今まで魔法なんて物はなかったから新鮮だった。まあさっき読んだのはまだ理解できなかったが、今から親に隠れてでもやって行けば五歳頃には初歩的な知識はつくだろう。

いや〜しかし、有難い事に今住んでいる所は海鳴りでは無い。ここはまったく知らない物語にも関係しない土地だろう。そこには大いに感謝した。

いきなり物語の登場人物とエンカウントして死亡フラグおっ立るとかなくて助かったぜ。なんせ俺はどこぞのチートオリ主じゃないからな。巻き込まれて死亡なんてごめんだぜ。

でも一つ心配なのは母親の祖母が海鳴りに住んでる事だ。

そう、そのせいでたまに海鳴りに遊びに行く事がある。今はまだ原作キャラ達とは会っていないがいつ鉢合わせるか判らない、はっきり言っただけを抜けない。

まあそんなそんな感じで今の所は平和な日々を送っている。

「伸君、お母さんこれからお買い物いくから伸君も一緒に行こう」

ふむどうやら買い物時間らしい。さて着いて行くか。

「うん」

そう言っただけ立ち上がり、お袋の方へ歩いて行く。

しかし、自分の体ながら歩き難いな。

手を広げて待っているお袋の元へ歩いて行く。この年（精神年齢

は20歳)になってこれはかなり恥ずかしい。

あ、因みに名前は崎月 伸樹。性は変わったが名は変わらなかった。まあ一々覚える必要が無いから楽でいいが。

さて、考えながらも準備は終わった。さあ買い物に出発だ！

## S i e d 母

最初はたんに珍しいから見ているのだと思った。しかし、毎回見かける度に何か違うと感じた。

それは有る出来事で確信に変わった。

ある日、買い物が終わらせた後にわざとテーブルの上に『デバイス制作の助け(初級編)』を置いて買い忘れた物があると言った。いったん外にでて、音を立てずに家に入り伸樹のいる居間を覗いてみた。するとそこには、一心にデバイス制作の本を読む伸樹の姿があった。暫く様子を見てみると、何やらブツブツと喋っているのが判った。何を喋っているのかと耳を澄まして聞いてみる。

『デバイスとは、魔導師が魔法の使用の媒体や補助として用いる機械である。その用途によって専攻があり、一分野に特化した機種が幾つか存在している。現在確認されている機種は『インテリジェントデバイス』、『アームデバイス』、『ストレージデバイス』、『ユニゾンデバイス』、そして『ブーストデバイス』の計5種である。

┌

伸樹の喋っている内容を聞いた時、本当に驚いた。いや、驚いたなんて簡単な言葉では表せられない程の衝撃だった。たかだか3歳の赤ん坊が、仮にもデバイス制作の本を声に出して読んでいる。

これは異常を通り越して異様だ。

私はただ黙って見ているしかできなかった。

しかし、ふと伸樹の様子がおかしな事に気が付いた。見ると、目を瞑り船を漕ぐように頭が揺れている。どうやら眠くなってしまったようだった。

不覚にもその赤ん坊らしい仕草に安堵感を感じてしまった。よかった、伸樹はまだ赤ん坊なのだ。

そう思いながら見ていると、どうやら完全に眠ってしまったらしい。いつの間にか床に横になり眠っていた。いけない、つい考え事をするとうりが見えなくなってしまう。

このままでは眠った私の可愛い息子が風邪を引いてしまう。そう思ったつと直ぐに伸樹の所に向かった。

「ほら伸君、床で寝たらお風邪を引きますよ。ちゃんとお布団で寝んねしましょうね」

「ん〜」

そう言いながらくずる伸樹を抱き上げ布団のある部屋まで連れて行く。目を擦りながら空いたもう一つの手で確りと服を掴む伸樹を見ていると、先程まで見ていた物が嘘のように思える。

こうして見る伸樹は年相応の可愛い子供だった。

もしかしたら、伸樹は他の子より少し成長が早いのかも知れないし、それとはまた別の何かなのかも知れないが、今こうやって抱き上げている子供は、私の何よりも大切な我が子に代りはない。

ただ、願わくばこの一緒にいられる愛しい時間が少しでも長く続きますように。布団の中で眠る愛しいその小さな存在を見つめ、私はそう考えていた。



UNU

第一話なのだろうか？（後書き）

どもあとがきです。とは言っても何もありません。まあ質問な  
どあればよろしく願います。

ではまた次回でお会いしましょう。

第二話なのだろうか？（前書き）

何だかんだで二話です。

## 第二話なのだろうか？

幼稚園も終わり帰りの時間になったが、迎えに来るはずのお袋は何時まで待っても来なかった。

お袋の代わりに来たのは、目を真っ赤に腫らした祖母だった。

その日胸の真ん中に穴が空いたような操質感を抱えた俺は、何時もの部屋の筈なのに何時もよりも、暗く静かに感じた。そして、なんとも言えない感情がその胸の穴から溢れ出すように、涙となって流れて行く。

「ふうっ……………ぐう……………ふぐう」

必死に押さえようとするとする声は、嗚咽となって零れ、押さえれば押さえるほど辛い現実を実感し、余計に涙が溢れ出す。

ふいに誰かに抱き締められた。

涙で滲んだ視界を、ユックリと右に向ける。そこには、自分を優しく抱き締める祖母の横顔があった。

必死に声を押さえ、泣くまいと体に力を入れた。でも、そんな痩せ我慢は祖母の言った一言で直ぐに我慢できなくなった。

「いい、いいから泣きなさい。今は泣きなさい。婆ちゃんが側にいるから、我慢しないでいいの」

その言葉を聞いた瞬間、俺の中の何かが崩れた。

「うぐう……………うああ……………ああ……………うああああああ、ああああ

あああああ、おがあざああん、あああああ、おどおどああん

それから俺は暫く泣き続けた、夕暮れに染まる部屋は俺の鳴き声と祖母のすすり泣く声が響いていた。

一度死に転生した俺だが、死の悲しさと残された者の思いは始めて知った。

改めて思う、前世の両親はこんな悲しみを感じていたのだろうか。このやり場の無い悲しみのような怒りのような気持ちを抱き、終わりの無い絶望感に心が飲み込まれる思いを。だが、辛うじて祖母のその温もりが俺を支えていた。

幼稚園の帰り道、泣き腫らした顔の祖母に聞いたのは、父と母の死だった。

この年のこの出来事は、俺が四歳になってから一週間後の事だった。

~~~~~年後~~~~~

両親の死から一年が経った、あれから両親と住んでいた家は祖母が引き払い、今は祖母の居る海鳴りで祖母と一緒に暮らしている。

あれから俺は、親父の書物等を無理言って引き取り、デバイス制作の勉強をした。そのかいあって、今ではストレージデバイスならば一人でも作れるだろう

しかし自分で見ても異常な程に俺はデバイス制作の勉強にのめり

込んだ。

まあ言わば現実逃避に近い形だった。ようは何か集中してないと両親の事を思い出してしまふのだ。今でこそだいぶ心の整理はついているが。

そんな俺だが、俺は自分の魔法資質がどれ程の物なのか知らない。両親は魔法とか次元世界の事とかは教えてくれなかったが隠してはいなかったのだろう。今思えば『デバイス制作の助け（初級）』なんて本が置いてある時点で隠す気が無い事は明白だ。ただ、実際に関わらせなくなかったのだろう、なんせ物騒な世界だ、そんな事に自分の子を関わらせたいと思う親は殆ど居ないだろう。

そして今は俺は、祖母に隠れながら作っていたストレージデバイスの最後の仕上げをしていた。

「この線を繋いで……………、よし、あとは装甲を被せて……………できた！」

よし！完成だ！！俺作ストレージデバイス1号！！

ストレージだからAIは積んでいない、でもその代わりに魔法データの記憶容量がでかいのが魅力だ。そして何より頑丈だ。

よし、これで今の所は原作開始までの準備は順調だ。

さっそく明日からデバイスの試運転がてら魔法の練習をしよう！

！自分の今の実力がどんな物かも知りたいしね！！

そう思っていると部屋のドアの外から祖母が話しかけて来た。

「伸君、まだ起きてるの？明日から小学校始まるんだよ、早くねて明日に備えなさい」

おっといけねえ、つい夢中になってたぜ。デバイス制作は内緒でやってたから祖母は知らないんだ、あんまり心配させるのも何だし今日は片付けて寝るか。

「うん、判ったよお婆ちゃん。お休みなさい」

「うん、お休みなさい」

そう言つと婆ちゃんは自室に戻って行ったのか、ドアの前の気配はなくなった。

フッフッフ、明日が楽しみだぜ!!

あ、因みに俺の行く学校は私立聖祥大附属小学校だ。そう、魔王やらバーニングやら吸血鬼さんやら脱げ魔やら腹黒狸やら原作キアラ達に通うあの学校である。……………正直言おう、鬱だ。

何であの死亡フラグ一杯のやつらと同じ学校に通わなければいけないんだ!!

なんでだろうか、俺は普通の市立でよかつたのに…………。祖母がせっかくだから自分の力を伸ばせる所がいいだろうって言うから受けたんだけど…………。

うん、解るよ言いたい事は。試験が有るんだから落ちるようになるばいいよね、うん、判ってるよ、判つてたんだよ。でもね、いざ遣るとなると、こうなんて言うか小学校の入試問題を間違えるのは何か嫌でさ…………。ええ、そうですよ、所詮はちっぴけなプライドから来る慢心からの失敗だよ。

…………とまあそんな訳で。俺はめでたく（不本意ながら）晴れて私立聖祥大附属小学校に入学することになりました。

はあ、…………まあ死亡フラグ回避のため頑張ります。

つづく

第二話なのだろうか？（後書き）

こんちは、二話でしたがどうですかね？

はいさっそく両親死亡フラグです。理由は何となく居ない方が自由がきくかなと……。まあ一応伏線でもありますがそれはまた物語が進んでからと言うことで。

ではまた次回でお会いしましょう。



第三話なのだろうか？（前書き）

第三話です、よろしくお願いします。

### 第三話なのだろうか？

バシイン、と言うビンタの音が響いた。そして次に少女の声が聞こえた。

「痛い、でもね、大切な物を取られた人の心はもっと痛いんだよ」

栗毛の短いツインテールの少女が言う。察しのいい人はもう已にお分かりだろう。原作のあの光景だ、三人娘の友情フラグ。

「この……………」

突然ビンタされ一瞬啞然とするものの、直ぐ様顔を怒りの表情に染め掴み掛かる金髪に近い茶髪の少女。

そして二人の取っ組み合いが始まった。

髪を掴んだり、服を引っ張ったりと。これは見ている方としては放って置けない。放って置けないのだが……………。

いかんせん彼女達は原作キャラ達だ。関わったら略100%の確率で俺の身が危ないだろう。

ハッキリ言って関わりたくない。今でも俺の中の警戒アラームがこの場から即刻退去しろと告げている。

どこぞのチートオリ主じゃあるまいし、俺はただの一般人だ。そして何よりヘタレだ、無理、未来の魔王やバーニングな奴に説教なんて出来るか！

そう思ったので直ぐ様子の場から立ち去ろうと体を翻したその時。誰かに服の左腕の肘辺りを掴まれ引き留められた。

何かと思い振り替えると、そこには俺の服の袖を掴む、深い青の髪をした少女が今にも泣きそうな顔でこっちらを見ていた。……………

…いや、俺にどうしろと？ 何かを懇願刷るような表情の少女に聞

き返す。

「何？」

「あ、えっと……あの」

「用が無いなら離してくれないかい」

「うう………」

何か今にも泣きだしそうな顔になった。………はあ、だから俺にどうしろって言うんだ？

「泣きそんな顔で訴えるんじゃない、ちゃんと言葉にしろよ。人は万能じゃない、言葉にして想いを伝えないと判らないよ？」

そう言っただけじゃあとその場を去るとした時、今度呼び止められた。

「ま、待って！」

まだ何かあるのか、いい加減此所から去りたい。そう、厄介な事に巻き込まれない内に！

しかし、その俺の考えも時既に遅かった。

一瞬躊躇った後に、意を決したように少女は言った。

「あの、二人を止めて下さい！」

「うん、無理」

俺の言葉に、また泣きそうになりながらも、聞き返してきた少女。

「な、何ですか？」

「だって、俺には関係ないもの」

怖いしな！俺が殴られるかも知れないし。

「そ、そんな……」

「それに……」

「……それに？」

「止めるべきは君だろ？あの栗毛髪の少女は誰の為にもう一人の少女を叩いたんだい？」

「っ……それは」

「さらに言えば、君はまだ彼女達に伝えていないだろ？自分の気持ちを、自分の言葉で」

「っ……！……うん」

何かに気付いた様に顔付きが変わった少女。ひと言言って頷くと、喧嘩をしている二人の少女の元へ歩いて行った。

……ふう、これで大丈夫だろう。原作通り三人は仲良くなり、俺はこれでおさらばし金輪際彼女達に関わらない。そうすれば俺はこれからも安全な暮らしが出来る。

よし、そうと決まれば直ぐに撤退だ！思うが否や、俺は速攻でそ

の場を離れた。

そして、俺は教室に戻り図書館で借りた『特殊相対性理論』の本を再び読み始めた。

暫くしてチャイムが鳴り、次の授業が始まる。

……………ふむ、これで判った。やはり俺の考えは正しかったようだ、まいったな……………。そう思いながら、俺は授業が始まったのを自覚し、机から教科書を出し開いて準備を終えた。

「と言う訳で、今日の授業はこれで終りになります。じゃあ宿題を出します、まず」

授業が終わり今はお昼休み。私立聖祥大附属小学校は給食が無い代わりに少しお昼休みが長い。

俺はと言うと、一人腕を組んで考えていた。

何を考えていたのかと言うと、それは俺の良すぎる頭の事だ。え？自画自賛？いやいや、自惚れとか過信とかじゃなくてマジな話しなんだって。

最初は転生者だから前の人生の分有利なんだ程度にしか考えてなかった。

赤ん坊の時も、デバイスの勉強してても子供の成長は早いから物覚えが凄く良い程度にしか考えてなかった。

しかし、その異常を裏付ける決定的な出来事は、ある当たり前の日常の中で訪れた。

それはありふれたいつも通りの夜だった。

何時もの様に7時少し前に夕食が終わり、祖母と一緒にテレビを見ていた。

前世の時もやっていた医療番組。何時もは興味を示さないのだが、

その時は何故だか番組に見入っていた。

『そう、それは閉塞性動脈硬化症だったのです』

（ああ、閉塞性動脈硬化症ね。間歇性跛行かんげつぱこうになって数十から数百m歩くと痛みのため歩行継続不可能になる症状が起こったりするやつな。それと、腰部脊柱管狭窄症でもみられる症状で区別が難しいんだろ。……………うん？）

俺はなぜか当たり前の様にその病状を理解していた。

（いや、待てよ、何で俺はこんなこと知ってんだ？）

まあもしかしたら前世の何処かで聞いた事があつたかもしれない。だがしかし、こんな難しい病名と症状を少し聞いたことがある位でここまで覚えているだろうか？いや、普通じゃかなり難しいだろう。まあ例えば、前世が超が付くほどの天才ならばまだ判る。だが俺だぞ？前世では成績も運動もルックスも自他共に認める、何処にでも居る極平凡な高校生だった俺だぞ？

あり得ないだろ普通。俺は寒気を覚えた、まるで俺が俺ではなくなつてしまったみたいだ。

そしてその時の俺は、その恐怖から目を背けるため前世ではたまにたま知っていたのかもしれないという、判りきつた言い訳を自分自身に言い聞かせ、無理矢理納得することにした。……………うん、へタレだ。

だがしかし俺も男だ。何時までも知らん振りと言うのはヤツパリなけなしのプライドが許さなかった。まあ決意するまで4ヶ月は掛かったが。

そして今日、俺はその俺の頭の異常を確かめるべく図書館に書物を借りに行った。そして借りて来たのは『特殊相対性理論』だった。分厚い本を借りて教室に戻る道すがら、その本の内容を確かめていた。

最初から読むのは、ただ理解するだけに等しかったので、より確実性を出すため、本の数十頁目から読み始めた。

そして、疑惑が確信に変わった。

そりゃ特殊相対性理論の名前くらいは俺だって知ってたさ。でもな、前世がこてこての文系だった俺は、その内容は知るわけがなかった。

だが、何故か俺は理解できた。できてしまったのだ。

これで俺の頭の中の異常が確実な物と実証された。知らないはずの知識の保有。マジで頭が狂いそうだ。いったいどうしたんだ俺は？

此で俺の頭の異常性は判った。だか判った所でどうしようも無い。まあ、これが二次創作の主人公とかなら、チートな知識使って俺 Tueee!! な事するんだろうけど生憎と俺にはそんな度胸も勇氣も無い。何度も言うが俺はヘタレだ。もしチートな力が有ってもそんな事はしないだろう。

ふっ、今の自己説明で決まったよ。俺は何を悩んでいたんだ？そうさ、俺の頭にどんな異常が有ろうとも関係ない！俺は俺らしく生きれば良いんだ、そう、自分らしい平凡な人生を！！ふっふっふっ、ハッハッハッ、あーっはっはっは！！ 心の中で俺的結論を出して、これまた心の中で一人高笑いを上げていると、不意にクラスメートから声を掛けられた。

「おい崎月」

この若干馴れ馴れしい奴は加藤。俺の一番中の良いクラスメートだ。

「ああ、うん何？」

「隣のクラスの月村さん達が呼んでるぞ」

「……………なん……………だと？」

「いやだから、三組の月村さん達が呼んでるって、ほら」

そう言つて教室の前のドアを指差す加藤。その先にはカチューシヤ（？）をした深い青髪の女の子がいて、目が会つと此方を見て軽く手を振っていた。

いや待て！その反応はヤバイ！！

そう思つた時には、既に何時もの鋭い目線が俺に突き刺さっていた。それは今俺の目の前にいる加藤の物も入っている。

とにかくこの空間はいずれい、いっただいどうしたものか……………。先ずは月村さんの所に行くか。

不本意だが、仕方がないので行くことにした。……………てかこれは死亡フラグではないだろうか？さつき平凡に生きるって誓つたばっかりなのにな。

そんな事を考えながら俺は、呼び出し人の所に向かう俺だった。

つづく



### 第三話なのだろうか？（後書き）

何とか出来ました第三話です、今回は少し難産でした。

主人公が少しずつ自分の異変に気付き始めました、次回も少し物語が動く予定です。

ではまた次の話で、次回もよろしくお願いします。

## 第四話なのだろうか？（前書き）

さて四話ですが、話は進んでいません。次かその次で進むと思います。

とにかく四話をどうぞ。

## 第四話なのだろうか？

「突然呼び出してごめんなさい。さっきの事でお礼が言いたかったんです」

なぜこうなったのだろうか？未だに判らない。

教室の扉の所で、深い青の髪をした少女の話を聞いている。

その少女の後ろには、栗色の髪の少女に金髪に近い茶髪の少女がいた。

な、何しに来たのだろうか。

………もしかして！復讐！？お礼参りか！？

ど、どうしよう。まいった、いっただいどうすれば！？

………まで、今お礼って言わなかったか？

おかしいな、さっきの事ってさっきの喧嘩の事だよな？

面倒くさいから言える事を言っただけだと思っただけだ………。

うん、それ以外に思い付かん。

判らん、本当に判らん。俺はあまりにも判らないので本人達に聞いてみた。

「いや、別に俺は何もしてないと思うが？礼を言われるような事はしてないが………」

「え？」

「アンタ………」

「あはは」

上から青髪の子、金髪に近い茶髪の子、栗色の髪の子である。

何だろつか、かなり話が噛み合っていないような  
まあいいや、そんな事よりも俺は早く昼食を食いたいんだ。

「まあ、中直り……と言っより仲良くかな？とにかく無事解決してよかったよ。それじゃ、俺弁当たべるからこれで、もう喧嘩するなよ」

そう当たり障りの無い言葉を残してその場を離れようとして  
。

「あの、私達もこれからお昼なの、良かったら一緒に食べない？」

何故かお昼に誘われた。いったいどういう事であろうか。

判らないな……。はっ！まさか！？此があ有名な体育館裏への呼び出しか！？昼食と言うのはその場の建前で、実際は体育館裏で三人で俺をタコ殴りか！？

……うん、ごめん、流石に無いね。

まあ、お礼だろうと抱腹だろうと、どちらにしても断るつもりだ。変に関わって死亡フラグなんてごめんだからな。なので早速断る事に。

「いや、せつかくだけど」

そう言った瞬間、何処からか突き刺さるような視線と殺気が俺を襲う。

な、何だこれは！？いったい何処から！？

凍り付いて張りつめた空気に、鳥肌が立って固まる俺。背中を冷たい汗が流れる。

ぐっ、何というプレッシャーだ……。

四方八方からの無言の突き刺さるような圧力に固まっている俺。すると、言葉を言いかけて固まっていた俺に栗色の髪の子が言った。

「えっと、一緒に嫌…かな。」

栗色の髪の子が言った瞬間、強い圧力が更に強くなる。くっ、いったい何なんだこれは！？

素早く周りを確認してみる。ああ、判った。無言の突き刺さるような圧力の正体はこいつ等の物か。

廊下や教室にいる全男子が全員此方を睨んだり、体は動かさず視線だけ此方に向けたりと、これぞ本当の針の筵だ。

俺は助けを求めるべく親友である加藤の方を向いた。しかし、加藤も他の男子と同じように俺を見ていた。

……………ブルータス基加藤、お前もか。

そして、明後日の方を見て固まっていた俺は、声を掛けられ顔を戻す。

「ちょっと、さっきから黙ってどうなのよ！ハッキリしなさいよね！」

金髪に近い茶髪の子が怒った顔で言ってきた。

いけない、早くこたえなきゃな。

そう思い改めて三人を見て動きが止まる。

怒りながらも不安を内包した表情の金髪に近い茶髪の少女。

制服のスカートを力強く両手で握って言葉を待つ深い青の髪の子。胸の前で手を組み、少し潤んだ瞳で此方を見る栗色の髪の子。

これは……………マズイ、色々マズイぞ。

次の瞬間、まるでブワツと言つ音が聞こえそうな位に、只でさえも強かった殺気とプレッシャーが更に強くなった。  
こっ、これは命の危機だ！

「お、屋上でいいかな？」

そう言うと、今までの不安そうな顔が一気に花が咲いたように笑顔になる三人。

「はい、いいですよ」

「うん、大丈夫だよ！」

「まっく、仕方ないわね」

三人の返事を聞き、急いで弁当を取って来る。  
突き刺さる視線の雨の中、素早く弁当だけ掴み取り三人が待つ廊下に出る。

そして、三人の後ろを付いて行く。

終始無言のまま屋上まで付いて行く。

しかし、いったいこの状況はどうすればいいのだろうか。  
まっくもつての想定外、緊急事態、最高厳重警戒態勢だ。  
屋上につきベンチに陣取る三人。  
ベンチは丁度三人でイッパイで俺の座る場所が無い。  
すると栗色の髪の子が、気を使ったのか席を譲ろうとする。

「あ、場所が足りないね。私立つから座っていいよ」

ふむ、席を譲ってくれるとは。やはり原作通りの『いい子』なの

だろう。

譲られたので、遠慮なく座ろうと、体を動かそうとしたその時、俺の頭の中を気づきが駆け抜けた！

……………そうだ、その手があったか。フッフッフ、やはり俺は天才なのか！行ける、これなら行けるぞ！！そう思った俺は早速実行に移そうとして、声を掛けられた。

「どうしたの？」

考えていた俺に疑問顔で聞いてくる栗色の髪の子。それに笑顔で返す俺。

「ああ、うん、ありがたいけど俺は地面でいいよ。君が座りなよ」

「え？でも……………」

まだ遠慮しているのか、うんと言わない。

ふ、ならばこうだ。

「なら、ここは俺の顔を立ててくれるかな。女の子を立たせるような偏屈な男になりたくないんだ、だから君が座ってくれると嬉しいな」

そう言って笑顔で返す。

すると栗色の髪の子はうんと言ってくれた。

「うん、判ったの」

よし、なんとかなったかな。栗色の髪の子も笑顔だし大丈夫だろ。すると今度は、金髪に近い茶髪の子が言った。

「そう言えば、まだ自己紹介してなかったわね。私は、アリサ・バニングスよ、アリサでいいわ」

それに続くように栗色の髪の子が言う。

「私は高町なのは、なのはって呼んで」

そして次は深い青の髪の子が言う。

「私は月村すずかです。よろしくね」

順番に自己紹介をする三人、となれば次は俺の番だな。

「俺の名前は崎月伸樹、よろしくな」

そう言って笑顔で返す。ここ重要、笑顔は人を安心させる、つまり警戒をとくのだ。

「それじゃあお昼食べよう」

間違っって呼んでしまわないよう今まで見た目の特徴で呼んでいたが、もう名前でもいいだろう。

そんなこんなで、魔王基なのはさんの言葉でお昼が始まった。

いつもの弁当箱を開け、箸箱から箸を取り出す。

すると、俺の弁当を見てなのはさんが聞いてきた。

「うわ、美味しそうなお弁当なの。お母さんが造ってるの?」



ふむ、どうやら今日のお弁当は美味そうに見えるらしい。  
ふっ、ここまで来るのに苦労したなあ。

卵焼きを何度焦がしたことが……、おっと今は感傷に浸ってる時  
じゃないな。

「えっと、家は親がいないから自分で作ってるんだ、だから自作な  
んだ」

「あ……………ごめんなさい」

俺の言葉に場の雰囲気が暗くなる、マズイ!?これでは死亡フラ  
グが回避できない!

そして俺は咄嗟に繕うように言う。

「ああいや、別に気にしないでよ。もう大分前の事だし、それに一  
人じゃないんだ、祖母と一緒に住んでるから。だから大丈夫だよ」

「……………そうなんだ、でも本当に大丈夫?」

「うん、ありがとう」

そうは言ったものの、場の雰囲気は払拭できない。  
ならば、話を変えて別の方に意識を向けてやる。

「でも、高町さんは優しいね」

「ふえ!?なんで?」

いきなりの事で驚くのは嬢。

それに追撃をかけるように言う。

「だって、両親がいない俺を心配してくれてるし、それに心配したり悲しんだりできるって事は、その相手の気持ちを理解して思いやる気持ちが必要じゃできないからね。だから高町さんは優しいと思うよ、ありがとう」

「……あう、うん、どういたしまして」

顔を赤くして黙ってしまったのはさん。……うんよし、これで大丈夫なはずだ。

「……アンタって、誑し？」

すると、突然アリサ嬢が怪訝そうな顔で聞いてきた。  
「たらし？なんの事だ？」

俺は良く分からないと言った顔をし、そしてこう言った。

「何の事が判らんが、俺何か変な事言ったか？」

まあかなり褒めちぎった感はあるが、その言葉事態は別に間違った事を言っていないはずだ。

原作でもなのはさんはそう言う娘だった。

「……いい、何でもないわよ」

そう言うときアリサ嬢は疲れたような顔でため息を吐く。  
むむ、ため息は良くないぞ。  
ため息を一回つくといつ幸せが逃げていく。二回つくといつ幸せが二回逃げていく。

ため息をつく度に幸せが逃げていくんだ。婆ちゃんが言った！  
……ああ、今の祖母の事な。  
んな訳で早速アリサ嬢に教える事に。

「バニングスさん、ため息はよくないよ。ため息をつくると幸せが逃げちゃうんだ、だから笑顔でいなきゃね。それに、バニングスさんみたいな可愛い娘は笑顔の方が似合うよ」

「な！？ななな、何言ってるのよ！？」

俺がため息の事を言うと、アリサ嬢は何故か顔を赤くして戸惑いはじめた。

はて？俺は何か変な事を言っただろうか？おかしいな普通の事を言っただつもりなのだが。

まあいいや、怒ってる訳じゃなさそうだし。

さてお昼休みも長い訳じゃないし、早く食べ始めないと時間がなくなっちまう。

そして、俺は弁当を食べ始めた。

アスパラのベーコン巻を一つ。

……うん、美味しい、アスパラにちゃんと火が通ってる。

次に出汁巻き卵、……うん、これも大丈夫だ、確りと鰹出汁の味が効いている。ちなみに出汁巻き卵は朝食の残りだ。

次にポテトサラダ、これは昨日の夜の残りだから大丈夫だろう。

……うん、大丈夫だ。

そうして食べていると、横からずか嬢が話しかけてきた。

「伸樹君のお弁当のおかず美味しそうだね、私のと交換しない？」

との申し出を受けた、するとなのはさんとアリサ嬢が横から入って来た。

「あ、いいな私も交換するの」

「ちょっと、二人だけズルいわよ！」

さて乱入してきた二人を含め俺はどう答えるべきか。

一、「うん、いいよ」と素直に申し出を受ける。

二、「誰がするかボケ、小娘が」と一蹴してこの場を去る。

三、「……………」ただただ無言で弁当を食べ始める。

ハッキリ言おう、もはや選ぶまでもない。

二なんて選んだ瞬間死亡フラグ確定だ。もう論外、今までやって来たことが水の泡になる。

三を選んでも同じだ、二とほぼ変わらないだろう。

今の今まで愛想よくやってきたのに不自然だし、三人の機嫌を損ねるのはマイナスにしかない。

と言うわけで必然的に一を選択する。

ふっふっふ、これでまた一つ死亡フラグを遠ざけたぜ、我ながら完璧だ。

「あはは、どうぞ」

そう言っつて弁当を差し出す俺。

それを見て三人はそれぞれおかずを取っていった。

お返しと弁当を出す三人。

なので遠慮なく頂く事に。三者三様の弁当だな。すずか嬢は純和

風な感じだし、アリサ嬢は洋風だ、なのはさんは一般家庭の手作り弁当だ。

それぞれおかずも交換し、弁当を食べていた。

俺は三人のお喋りに、軽い返事や相づち程度にして応えていた。軽視せず関わりすぎずだ。全く相手をしないで機嫌を損ねる事もなく、されど関わりすぎず、深い仲にならないようにするための作戦だ。

ふっ、我ながら超完璧だな。

そんな事を考えながら箸を弁当に向けると、すでに弁当の中は空だった。

おっと、いつの間にか食べ終わっていたらしい。

時間を確認するとあと数分で昼休みが終る時間だった。

でも今さらだが、この学校って一年から五時間目が有るんだよね……進学校だからなのか？

転生前の学校は勿論市立だった。なにせ極平凡な子供だったからな。

おっと、話がそれたな。

さて、そろそろ俺はおいとまさせていただきますか。

「さてと、名残惜しいけど俺はそろそろ教室に戻るよ」

「え？もっ？」

なのはさんが頭に疑問符を浮かべながら首を横にかしげて言う。それにもつとらしい言い訳を付ける俺。

てかなのはさん、その仕草は危ないですよ、そっちの人達なら一発で落ちる可愛さです。

「うん、次の授業の用意もあるからね」

「そっか、うん判ったの」

「それじゃ、もう喧嘩しないようにな」

「あはは……」

「ふん、言われなくても判ってるわよ」

「ふふ、それじゃまたね」

三人の返事を受け、俺は屋上を後にした。

ふっふっふっ、これで危機は去った。

俺は自由だ！フリーダムだ！！

乗り越えた、やりきった、完遂した！！

死亡フラグを乗り越えた俺は、有頂天で教室に向かっていった。

そう、屋上を去るさいすずか嬢に言われた言葉の深い意味も考えず……。

## 第四話なのだろうか？（後書き）

はてさて四話ですが、前書きでも言ったように話は進展していません。

まあこれからですかね。

そんなわけで次かその次で進展させたいと思いますが………問題  
は主人公の能力なんですよね（汗）

ある程度は何を使うか考えております、まあ今後に期待と言つこと  
で一つよろしく願います。

そんな訳でして今回はこの辺で失礼します。

ご意見・ご感想、又はご指摘や誤字報告など随時受け付けており  
ます、よろしく願います！

ではでは、また次回でお会いしましょう！

閑話 番外編 伸樹の夏休み 幼稚園編 (前書き)

今回はちょっととした過去編です。



閑話 番外編 伸樹の夏休み 幼稚園編

今日は、崎月伸樹です。

俺はいま特急の列車に乗り海鳴に向かっています。

向かい合わせの座席で横には母が、向には父がいます。

そして今俺は窓側の座席で外の景色を見えています。

まあはたから見たら普通の子供が楽しそうに外を見ている様に見えるでしょう。

いやまあ、景色を眺めるのは勿論好きだよ？

問題は向かつてる場所なんですよ。

さきも言ったように、今は海鳴に向かっている。そう、あの原作キャラがわんさかいるあの海鳴にだ。

まあ順を追って説明するとだ。

今は8月の中だ。そして幼稚園も夏休み中なのだ。

そこで我が両親は御盆に合わせて休みを取り、祖母に会いに行くついでに祖父の墓参りもしようと言う事らしい。

………はあ、鬱だ。

ハッキリ言っただ俺は行きたくなかった。

二次創作だとか言う時は必ずと言っていいほど原作キャラとエントウントするのが定番の王道だ。

チートな最強オリ主ならば良いだろう、だが俺は普通のヘタレ一般人だぞ？

原作キャラとのフラグなんか死亡フラグにしかないだろ。

勘違いしてもらっては困るが祖母には会いたい、だが原作キャラには会いたくないのだ。

あゝ嫌だな。

そんな事を考えていると、列車がトンネルに入ったのか、外が真

っ暗になった。

そして暫くすると、トンネルを抜けたのか目の前が明るくなり壮観な景色がそこにあった。

列車が走っている場所が高いのか、眼下には町が広がり、その先には海が見える。

さすがに落ち込んでいた俺もこの眺めには心が動いた。暫し見入っていると到着を告げるアナウンスが流れた。

『次は海鳴、海鳴。御降りのお客様は、お忘れ物の無いよう御注意ください。』

現在の時間は午後の五時。

祖父源三の墓参りを終え今は祖母の住んでる家にいる。

列車での四時間半の長旅は幼い体にはこたえたのか少し疲れた。軽く欠伸をした俺に祖母は笑ながら声をかける。

「おやおや、疲れたかい伸君」

「ん〜ん、大丈夫」

「そうかい、もう少しでご飯にするから少し待っててね」

「うん」

そう言って母と一緒にキッチンへ入って行った。

今俺は父と一緒にテレビを見ている。まあ普通のニュース番組

だ。

そしてその日は少し豪華な夕飯を食べ終わった。おっと、勿論シヤワーは浴びたぞ。

「行ってきまーす！」

「伸君、お昼には帰って来るのよ！」

「うん、判ってる！」

そう言っただけ俺は虫網と虫籠を手にも外に駆け出して行った。

向かう場所は海鳴自然公園だ。

海鳴自然公園は小高い丘になった山の上にある。ほぼ家の裏の裏山と言った感じだ。

とは言っても本当に虫を捕まえに行くわけではない。

これはあくまでカモフラージュだ。

では何をしに行くのかと言うと、デバイスの本を読むために行くのだ。

家ではゆっくり読めないため俺はいつも外にでて読んでいる。

今日も今日とて本を読んできたのだ。

しかし、虫を取りに行くと言う名目で来ているので虫を持って帰らないと怪しまれる可能性がある。なので俺は虫を取ってから本を読む事にした。

虫を取り始めて30分。しまった、つい童心に帰り夢中になって

しまった。

おかげでけっこう取れたぞ。

カブトムシ二匹にクワガタが一匹、そして蟬が三匹に猫が一匹だ。ふぶん、我ながら中々だな。てか何故猫がいるのかと言うと、虫取をしている途中で会い何故かなつかれたからだ。

ふっ、猫を虜にしてしまつとは、自分の能力が怖いぜ。

そんなアホな事を考えながら森林から公園に出て、本を読むべくベンチに向かう。

すると、そこにはベンチに座りうつ向く同じ年ぐらいの少女基幼女がいた。

うっん、参ったな。ベンチで読もうと思ったんだが。

他のベンチでもいいんだが、日影に有るのはこのベンチだけなんだよな。……仕方ない、別のベンチに行くか。

そう決めた俺だったが、別のベンチに行こうと体を動かしたその時、俺の腕の中にいたフィリップ（俺命名）が腕から飛び降りその幼女の方へ行ってしまった。

「きゃ〜」

「あ、ねこさん」

フィリップを見てそう言った幼女。その幼女の膝の上に飛び乗るフィリップ。

それを笑顔で撫でる幼女。

まあいつか、そう思った俺は再び他のベンチに向け歩き出した。すると三歩くらい歩いた所で後から残念そうな声が聞こえたかと思つと、俺の足にフィリップがまとわりついてきた。

ん？フィリップは幼女の所に居なかつたっけ？

そう思い俺は幼女がいたベンチに目を向けると、ベンチから立ち

此方を見る幼女と目があった。

……どうしよう、何か気まずいな。

すると、フィリップが俺に向かい鳴いた。

「にゃ〜〜」

「何だよフィリップ」

気まずい雰囲気にならねずフィリップに話しかける俺。

猫の言葉など解るわけがない、だが信じる！自分の可能性を信じるんだ俺！さあ、今こそ覚醒しろ！俺の才能<sup>「スモ」</sup>！！

とか馬鹿な事を考えていた。

「にゃ〜〜」（相手をしてあげないのかい？）

……な、何だと!？

いま、二重音声で何か聞こえたぞ!？

何だ今のは!？まさか、フィリップの声なのか？

それを確かめたく、俺はしゃがんでもう一回フィリップに話しかけてみた。

「おい、すまんがもう一度言ってくれ」

「にゃ〜〜、にゃ〜〜」（だから、あの子の相手をしてあげないのかい？）

やはり間違いない、フィリップが喋ってるのか。いや、俺が理解出来てるのか？

すると、頭を抱えながら考察していた俺に、横から声がかかる。

「こんにちは、そのねこさんはあなたの？」

少し舌つ足らずなその声にハッと我に返り顔を上げ声の主を見る。  
そこにはベンチにいた幼女がいた。

少女の問いに答えようとしたのだが……。

「いやこいつは」「にゃ〜」（相棒さ）「ちょっとまって」

「????？」

おっと、幼女が何言ってるのって顔してる。

「えっと、こいつは家の猫じゃないんだ、さっき虫取してるときにあつたんだ」

「へえ〜、ねこさんのおなまえは？」

「にゃ〜、にゃ〜」（僕かい？僕の名前はフィリップさ）「

「いや、わからんだろフィリップ」

たぶん俺以外は解らないと思うので突っ込んでおいた。

「？、ふいりつぷ？」

疑問形で聞いてきた幼女。

おっと、つい突っ込んでしまったが普通に考えて怪しいな、次から自重しよじ。

「あ、うん、コイツの名前だよ」

「そっか、こんにちはなの、ふいりっぷ」

「にゃ〜（ああ、こちらこそよろしく）」

そう言って幼女の足にまわりつくフィリップ。

そのフィリップをしゃがんで嬉しそうに撫でる幼女。

まったく、本を読む予定だったのに、フィリップのおかげでこの幼女と関わる事になってしまった。

まあ乗りかかった船だ、このさいベンチで俯いてた訳を聞いてみるか。まあよく考えたらエンカウント率なんて何万分の一たぜ？大丈夫だろ。と言うわけで俺は聞いてみる事に。

「そう言えば、さっきベンチに座りながら暗い顔してたね」

「にゃ〜（その話し、興味深い）」

フィリップお前は黙ってる。

「くらいかお？」

おっと、相手は幼女だった。まだこう言う表現は判らんか。うん、ならこう聞くか。

「さっき、座って下向いてたね？何か嫌なことあったの？」

「……………っん」

「そっか、何があったの？よかつたら教えてくれるかな？」

「うん、あのね……」

そうして幼女は話し始めた。

辿々しいながらも話した幼女。その話しを簡単に纏めるところだ。仕事中の事故でお父さんが入院してしまったらしい。

それもかなり酷い状態で、お母さんもお店をやっていて働いて要るらしく、兄と姉が手伝ってはいるが大変らしい。しかも兄はお父さんの事故以降どこか怒ったような雰囲気らしい。

まあ父親の事故で精神的に大変なのも有るのだろう。

自分も手伝おうと何か出来ないか聞いたが優しく断られ何もやらせてもらえなく疎外感を感じてしまっている。

とまあそんな感じだ。

「そっか、大変だったな」

そう言って幼女の頭を撫でた。

とは言っても身長や年齢は変わらないから変な感じだが。

まあ精神年齢は違うからいいよな？いや、むしろ駄目か？

コラそこ！ロリコンとか言っつな！俺はノーマルで普通だ！変態紳士じゃない！

「…ふえ」

「ふえ？」

一人でアホな思考をしていると、幼女が妙な声を発した。

見ると目を潤ませ涙を貯めている。涙のダムは決壊寸前だった。

……この子はこの子なりに頑張って来たんだろうな。



まったく、こんな幼女に精神的負担をかける兄貴はどっしようもないな。俺が前の体だったら一発殴ってやるところだ。

まあ現実的に無理だが。

なので俺は、目の前の泣き出しそうな幼女を優しく抱き締めて言っただけだ。

「泣いていいんだ、甘えていいんだ。辛いときは辛いって言っただけだ」

そう言って抱き締めながら優しく背中を撫でた。

「……う……うあ……うあああああああ」

堰を切ったように泣き出した幼女。

その小さな背中を、泣き止むまで擦り続けた。

暫くして、何とか落ち着いてきた幼女。

あゝあ、涙と鼻水でぐちゃぐちゃだよ。

仕方がないので家を出るときに渡されたハンカチで拭いてやる事に。

顔を拭き終わって落ち着いた幼女に聞く。

「大丈夫か？」

「……」

すると無言でコクンと頷いた。

一人で抱え込んでどうしようもなくなってたんだろっな。

よし、ここは年上（精神的）として良い事を教えてやるっ。

「なあ、今言ったきみのその気持ちを家族に話してみたらどうだ？」

「…きもち？」

「うん、そう」

「でも……」

少し暗い顔をして下を向いてしまった。

「大丈夫だよ、怖いかもしれないけど勇気をだして言ってごらん、そしたら皆君の事判ってくれるよ」

「…でも」

うん、どうしたもんか……。そうだ！たしかアレがあったはず……、あったあった。

「そうだ、良いものをあげるよ」

そう言って俺が取り出したのは壊れたデバイスコアだ。

見た目はレイジジングハートの待機状態と同じ感じだ。色は青だが。

壊れたといってもヒビが入ったりはしていない。損傷しているのは中のデータベースの部分で既に起動できなくなっている。

「これなあに？」

「これは特別な石さ、お守りだよ」

そう言って幼女にデバイスコアを渡す。

「おまもり?」

「うん、勇気がでるお守りさ、勇気が出ない時、勇気が欲しい時、この石を手に持って胸に当ててごらん、きっと勇気が出てくるよ」

「……ほんとう?」

「ああ、本当」

そう言って笑顔で返すと、幼女も明るい顔になった。

「うん、ありがとうなの」

そして幼女は可愛い笑顔を浮かべた。

うむ、これでもう大丈夫かな。

そう思いふと公園入り口の時計を見ると、時計の針は13時をさしていた。

「やば!?!」

「ふえ?」

「わるい、俺もう帰るわ」

「え?」

「じゃあな、ちゃんと気持ち伝えるんだぞ!」

そう言って俺は網とカゴを持って走り出した。  
やばい〜！母さんに怒られる！

そう焦りながら、遅くなった言い訳を考えて。  
こうして、幼少のちよつとした思い出は終わった。

その日から二日後、俺は両親と共に家に帰る事になった。  
あの後から海鳴自然公園に行く事はなく過ごし俺は無事家へと帰  
還した。

そう、まさか未来であんな事になるとは知らずに……………。

つづく

閑話 番外編 伸樹の夏休み 幼稚園編 (後書き)

こんにちは、又は今晚はグルタミンです。  
番外編いかがだったでしょうか？

何か主人公が訳解らない能力を開花させましたね、今後もこんな  
感じで開花させていきたいと思います。

とまあ、今回は過去編だったので話は進んでいません。いません  
が……まあ言わなくても判りますよね？

そんなわけで、次は少し話が進むと思います。

とにもかくにも番外編は楽しんでいただけましたでしょうか？

ご意見・ご感想又はご指摘や誤字報告など随時受け付けておりま  
す。なにとぞよろしく願います！

ではでは、また次回でお会いしましょう！

第五話なのだろうか？（前書き）

お待たせしました、第五話です！…え？待ってないって？  
失礼しました。

今回は伸樹が空回りしまくりです。  
てかコイツ等、精神年齢高すぎないか？

## 第五話なのだろうか？

「だから、 $24 \div 6 = 4$ になります」

今は数学……失礼、算数だな。

まあ四時間目の算数の時間だ。

……いや、てかさ。小学校の一年生の後半から割り算なんてやったっけ？

おかしいな……、俺の前世ではこんなに早くなかったはずだが？

あれか、俺の前世が市立だからか？ そうなのか？

……やめよう、こんな不毛な問いかけ。

はあ、現実逃避も長くは続かないな。

間もなく四時間目も終わる。

またあの時間がやってくる。そう、地獄のようなあの時間が。

「さて、今日の授業はこれで終わりです。それでは宿題をだします、宿題は――」

毎度の如くだが宿題が出た。

いやまあ、別に大変じゃないし。むしろ簡単だから別にたいした事じゃない。

……だけどなく、家のクラスで出たって事はあいつ等のクラスでも出たんだろうな。

ヤベエ、まじで鬱だ……。

しゃあない、今日もチャイムと同時に逃げるか。

まあ、何から逃げるのかと言うとだね。それは。

キンコーンカーンコーン

よし鳴った！今だ！

そう思うが早いか、俺は弁当を掴んですぐさま廊下に飛び出した。しかし、あいつ等も同じ事を考えていたらしく、既に俺のクラスに向かっていた様で直ぐに見つかってしまった。

「あ！伸樹！まちなさいよ！」

何処に待てと言われて待つ馬鹿がいる！

その声を聞いた俺は、その声の主を確認もせず走り出した。

「あ！こら、逃げるな！」

無理です！！

全速力で階段を駆け降りる。

ハア、なぜこうなったのか……………。

それはこの間の御弁当事変（加藤命名）まで遡る。

あの時の帰り際、すずか嬢の『またね』と言う言葉が発端と言ってもいい。

俺は樂觀視し、その言葉を社交辞令だと軽く考えていた。

しかしどうやら彼女等の中ではそうではなかったらしい。

次の日に、またお昼に誘われた時は本気で危機感を感じた。

このままでは原作のゴタゴタに巻き込まれる。

本気で危惧するべき事態だ。

そしてその次の日から俺は逃げる事にした。

最初は上手く行っていた。



彼女達に会わないように場所を変え、時には移動しながら弁当を  
食べる。…まあ先生に見つかった時はかなり怒られたが。  
そんなこんなで最初の三日間ぐらいはよかったんだ。  
しかし彼女達も馬鹿じゃなかった。

流石にこう何回も会えないのはおかしいと思っただらしい。

弁当を食べてクラスに戻ると、いきなり加藤にドロップキックを  
かまされ、食べた物をぶちまけそうになりマジでコイツ殺ろうかと  
考えたが、次の加藤の言葉に加藤への殺意は消し飛んだ。

「おいこら伸樹！お前は何時から裏切者になったんだ！！隣のクラ  
スの月村さん達がお前を探し回っていたぞ！！畜生、お前はあの時  
の約束を、桃の木の下で交わした『俺達は女は作らないさ！』とい  
う男の誓いを忘れたのか！」

いや、そんな物を誓った覚えも交わした覚えも無いぞ、勝手に捏  
造すんな。

てか彼女もいないし、まったくそんな関係ではないから。

そんな訳で、その次の日から俺の華麗な逃走劇が幕を開けた。

そして、今俺は階段を駆け上がっている。

向かっているのは屋上。

散々と逃げ周り、遭遇する際には彼女達を誘導しながら逃げてい  
た。

そう、俺は高い所には逃げないと思わせるように。

時には言葉で、時には行動で。

そのかい有ってか、彼女達を撒き屋上に行った時は、そこには誰  
も居なかった。

屋上の扉を開け周りを確認する。うむ、気配は無い。…まあ気配

なんか探れんが。

「ふっ、完璧だ……ふっふっふっ、残念だったな明智くん。俺の勝ちだぜ！」

しかし、そんな馬鹿芝居を一人やっている、いきなり後から声を掛けられた。

「残念だね、私達の勝ちなの」

その声に一瞬肩をビク付かせ、錆びたネジの様にギギギと音が聞こえそうな動作で後ろを向くとそこには

「な、何故ここが!？」

そこには、なのはさん、すずか嬢、アリサ嬢の三人がいた。

何故だ!？何故彼女達が此処に居る!？

俺の策に掛かったはずなのに!ま、まさか!？

俺の表情から察したのか、アリサ嬢が話し始める。

「ふん、アンタの考える事なんてマルツとお見通しよ!」

ババーン!と音が鳴りそうな感じで俺を指さすアリサ嬢。

TRICKか?山田なのか?ネタ的に古くないだろうか?

まあ今はいいや。

しかし、まさか誘導していると思ったら実は俺が誘導されていたとは。

これぞまさに策士策に溺れると言った所か。

くっ……、少し彼女達を甘く見ていたようだ。

最早俺に逃げ場は無い。

いや、逃げようと思えば逃げれるさ。三人を無理矢理振り切れれば、  
な。

だがしかし！ヘタレの俺にそれが出来るだろうか！いや、出来な  
い！反語！

そんなアホな事を心の中で豪語していると、なのはさんが真剣な  
でも少し不安そうな顔で話し始めた。

「ねえ、伸樹君」

「な、何でございましょうか？高町さん」

俺がそう言うと、不安そうな顔を今度は少し悲しそうな顔にして  
言った。

「伸樹君は……私達の事嫌い？」

……はい？いきなり何を言い出すんだこの娘は？  
さっぱり判らん俺は聞き返してみた。

「いや……なぜそんな話しに？」

「だって……伸樹君私達を避けてるもん」

うぐう、まあ確かにそうなんだが、別に嫌いだという訳では無い  
んだが……。

「いや、別に嫌いじゃないが……」

「じゃあ何で？」

ぐはあ！辞めてくれ！その寂しがる子猫の様な瞳で俺を見ないでくれ！

ヘタレの俺には耐えられないんだ！！

しかし、どうした物か。原作の話しに関わりたくないから貴女達に関わりたくないです、とは言えないしな。

ふと三人を見ると、三人とも神妙に不安そうな顔で俺を見ていた。

……本当にどうしよう？

「えっと、それは」

「……それは？」

ハ、ハモった。

仕方ない、こうなったら本当の事を交えて話すしかない。

「いや、ほら、三人て男子の間で人気有るだろ？そんな三人と必要以上に仲良くしてると、まあ周りから良い目で見られない訳で……。かなり目線が痛いんですよ、男子の」

俺がそう言うと、啞然とした表情の三人。

まあ俺から見ても紛い無く可愛いと思うよ。

すると、啞然とした表情から今度は少し怒った表情になった。

「バツカみたい！そんな事で逃げ回ってたわけ？そんなの放っておけばいいじゃない！」

いや、そうもいかんのですよ。

うちのクラスの男子内ヒエラルキーの最下層に居るんだよ俺？  
クラスで飼ってるメダカより下ですよ？まじで。

「えっと……人気って？」

首をコテンと傾げて聞いてくるなのはさん。

ええ、天然なんでしょうねこの娘は。

わざとじゃなく自然にああ言った動作をやってるんでしょう。…  
…なのは、恐ろしい娘。

と、いけない、今は質問に答えなきゃな。

「いや、そのまんまの人気だよ。ほら、三人とも可愛いし」

「なっ……！？」

「にゃっ……！？」

「か、可愛い……」

うん？何に驚いてるんだ？それに『にゃ』ってなんだよ。

てか俺何か変なこと言ったか？

……前にもこんなこと有ったような……。いや、深く考えるのは  
止めておこう。

「まあ、そんな訳で追いかけてくれないでくれると有難いんだけど」

「じゃあ逃げなきゃいいじゃない！」

いや、だからなんでそうなる？  
俺の話を聞いてた？

「いや、でもなあ。」

俺がそう言った時、俺の言葉を遮る様にすずか嬢が言った。凄く真剣な顔で。

「伸樹君」

「は、はい。何でしょうか月村さん」

「さっきもなのはちゃんが聞いたけど、私達の事嫌い？」

「え、いやそんな事は有りませんが……」

「そっか、じゃあ一緒に御弁当食べるのは嫌？」

「え？……ええっと」

困ったな、どう答えるべきか。

いや、客観的に見ても一男としても可愛い女の子とご飯を食べるのは楽しいし好きだ。

でもいま重要なのは三人が主要人物だと言う事だ。その一人のなのはさんなんて主人公だぞ？

関わったら命が幾つ有っても足りない様な気がするんだが。

だから関わりたくない。……だけどな、常日頃から言っているよ

うに俺はヘタレだ。

だから、こつ言つ言い方しか出来ない。

「いや、嫌じゃないよ。むしろ三人の様な可愛い娘達とお昼を一緒出来るのは嬉しいけど……」

何か一瞬三人の様子が変だったが…。

まあいいや、とにかく今は言い訳だ！

「けど……？」

「けどね、俺は目立つのが好きじゃないんだ」

「……へ？何それ？」

ん？何だ、何で三人ともそんな拍子抜けした顔してるんだ？

「目立ちたくないって……、今更何言ってるのよ」

え？今更ってどう言つ事？

「えっと、バニングスさん今更ってどう言つ事？」

「アンタ、知らないの？」

「……何が？」

「……はあ」

た、ため息付かれたぞ！？

え？何で？

そう思ってた俺に、アリサ嬢が俺の疑問に答えてくれた。

「アンタ、自分が有名だつてこと知らないの？」

はい？何ですと？

アリサ嬢の言葉に、俺が判らない顔をしていると今度はすずか嬢が話し始めた。

「えっと、本当に知らない？今年の入学試験でトップの成績で合格した男の子で、休み時間には良く解らない難しい本を読んだり、かと思つたらいきなり一人で計算式を書き始めたり。でもそれを鼻に掛けたりしないし、勉強とかで解らない所を聞いたら優しく教えてくれる変な子だつて。結構有名だけど？」

……なん……だと？

てか、すずか嬢の言葉が胸に刺さる。

へ、変な子かあ……。

地味に効くなあ。

いやしかし、そんな事になつてたとわ。全く知らなかった。

良く解らない難しい本で、まさかデバイス制作の本かな？

誰も解らないと思つて持つてきてたが……しくつたな、まさかこんな事態になつてるとは。軽率だった。

でも仕方ないじゃないか！誰だつて転生できたら魔法を使つてみたいはずだ！自分でデバイス作つてみたり、オリジナル魔法を作つてみたりしたいはずだ！

その結果がこれだよ……畜生。



てかトップの成績だったのか……、初めて知ったよ。  
いや、まあ小学校の入試だったから難しくはなかったが。  
しまった、まさか自分でこうなる原因を作ってたのか……。

はは、何か一人で空回りして馬鹿みたいだ。  
俺はその場で項垂れてしまった。

「えっと、大丈夫？」

「…哀れね」

「あはは……」

もう返す言葉も無かった。

……絶望した！原作キャラに関わりたくないとか良いながら自分で関わる要因を作ってた事に絶望した！！

はあ……鬱だ。

「にやはは……、御弁当…食べよっか？」

うう、なのはさんの優しさが胸に染みる……。

「……………うん」

もう自暴自棄だ、やってらんない。

俺は言われるがままに昼の準備を始めたのだった。

あれから、頂垂れて落ち込む俺を励ましつつお昼の弁当を食べ始めた。

他愛もない話をしながら、それぞれの弁当を食べていた。すると不意にアリサ嬢が俺に話をふってきた。

「ねえ、そう言えば伸樹のクラスって今日の算数の授業で宿題でた？」

「え、うん、でたけど。それが？」

アリサ嬢の問に答えて聞き返すと、今度はさすが嬢が応えてくれた。

「あのね、私達のクラスも宿題がでたの。それであの先生だからきつと同じ範囲だと思うんだ、伸樹君のクラスの宿題って何頁から？」

「俺か？俺のクラスはドリルの24頁からだけど」

「本当？じゃあ同じなの！」

何故かなのはさんが嬉しそうに答える。

いや、何がそんなに嬉しいんだ？

しかし、今までの話を総合して考えて俺は一つの答えにたどり着いた。

そうか、そう言う事か！

やはり、こうなったか。最初に危惧してた通りだよ！  
てか落ち込んですっかり忘れてた。

そして、すずか嬢の言葉がその俺の考えを確たる物に変える。

「やっぱり、それでね、その宿題を皆でやるって事になったんだけど……。伸樹君も一緒にどうかな？」

ふっ、やはりそう言う事か。

まあ、さっきまでの俺なら断ろうとしていただろう。

だが甘いぜ！今の俺は皮剥けたんだ！

つまり、俺は新しい道を見いだしたのだ。

それは、三人とある程度関わるが原作の話しには干渉しないと云う物だ！

今までは人物に関わる事すらしないようにしていたが、もうここまで関わってしまったては仕方がない。

だから人とは関わるが事件や物事には関与しないと決めたのだ！

こらそこ！開き直りだとか、どうせ巻き込まれるとか言うな！

てな訳で、俺は肯定の意を示す事にした。

「ああ、俺は構わないけど」

「本当？」

「やった！」

「まあ、当然よね」

何だかな、すずか嬢となのはさんのリアクションもオーバーだとは思うが、アリサ嬢の態度もどうかと思うんだが……。

まあいっか、ツンデレだし。

「…何か失礼な事を言われたような気がするんだけど」

「うお！？鋭いな…、ニュータイプかよ。」

「いえいえ、何も言ってますんが」

「…本当かしら？」

「本当だつてば、バニングスさんは疑り深いな」

そう言った俺を睨むように見るアリサ嬢。何だ？そんなに俺は信じられないのか？

俺がそう思つてアリサ嬢を見ていると、不機嫌そうな声でアリサ嬢が言つてきた。

「前から思つてたんだけど、何でアンタは私達を苗字で呼ぶのよ？」

「あ、そうそう、前から気になつてたの！」

「うん、私達は伸樹君て下の名前で呼んでるのに、伸樹君は私達の事を苗字で呼ぶよね」

あれ？何か俺追い詰められてない？

さっきあまり深く関わらないつて決めたばかりだよな？え？最早挫折？

それは困るので言い訳をしようとした。

………したのだが………。

「いや、ちょっと待ってよ高町さ　「なのは」…へ？」

いきなりなのはさんに言葉を遮られた。

「なのはだよ」

…えっと、呼び捨てにしると？何で？

いや、そんな笑顔で言われても。

普通そう言うのってもっと仲良くなってるからだろ？

仕方ない、こうなったら他の二人に言うしかない。

そして俺は話を振るべく、今度はさすが嬢に言った。

「いや、だからね月む　「さすがです」……」

…貴女もですか？くっ、こうなったら仕方がない、最後の頼みの綱であるアリサ嬢だ！

俺は、今度はアリサ嬢の方を見て言おうとした。

「いや俺はねバ　「アリサよ」……」

まだ名前の一文字しか言ってないのに…。

はあ、判ったよ。もう諦めたよ。呼びますよ、呼べば良いんですよ！もうやけくそだよ！

「判ったよ、観念するよ……なのは」

「うん！」

何がそんなに嬉しいんだか…。

そこには笑顔で頷くのはさんがいた。

「ちょっと！なのはだけズルいわよ！私とすずかも呼びなさいよ！」

ああ、判ったからそんなに騒ぐなよ。

「判ってるってアリサ、そんなに騒ぐなって」

俺がアリサ嬢の名前を呼ぶと、何故かソツポを向いて答えた。

「わ、判ればいいのよ！」

何なんだ？良いのか嫌なのか判らない奴だな。

俺がそう思っただけでアリサ嬢を見ていると、不意に右腕の袖を軽く引っ張られた。

何かと思い、そちらを見ると、ジーッと俺を見るすずか嬢がいた。

な、何だ？……………もしかして。

「何？…すずか」

「はい」

やっぱり、そうだったらしい。

まあつまり自分も呼んで欲しかったと。

あえて言おう、何故こうなった？

そして俺は再び頂垂れた。

すると、すずか嬢が申し訳なさそうに言ってきた。

「えっと、嫌だったかな？」

頂垂れた俺がそう言う風に見えたのか、そう言ってきた。

「いや、嫌じゃないよ。でもさあ、たいして仲良くない男子に普通下の名前で呼ばせるか？」

俺がそう言うと、何か不思議な事を聞いたと言っような顔でなのはさんが聞き返してきた。

「仲の良くないって？」

「え、いや俺達が」

「え？でもなのは達と伸樹君は友達だよ？」

さて、いつのまに友達になったんだ？

俺はお礼したいからって一緒に飯を食ったのと追いかけられた記憶しかないぞ？

「いや、いつの間に友達になったんだ？」

「え…？だって一緒に御弁当食べたし」

「いや、食べたけど…」

俺がそう言うとか何か三人とも顔つきが不機嫌そうになった。

あれ？俺何か間違った？

「もう！伸樹君は考え方が堅すぎるの！それに、友達はなるんじゃないかってるものだよ！」

…さいですか。なんかなのはさん言葉を聞いたら、ぐじぐじ考え  
てた自分が馬鹿らしくなってきた。

「友達になるんじゃないかってるものか……確かにな、俺が悪か  
ったよ、なのは」

「どういたしましてなの！」

そう笑顔でなのはは言った。

すると、話が終わるのを待っていたかの様にアリサ嬢が話し始め  
た。

「まとまったわね。全く、無駄な話で時間使ったからもうお昼休み  
も少ししかないじゃない」

「うっ………面目ない」

言葉もありません。

「まあまあアリサちゃん」

そう言ってアリサ嬢をなだめるはずか嬢。

そして、気を取り直してアリサ嬢が言った。

「それで、さっきの話しの続きなんだけど。宿題をやるとして、何  
処でやるかなんだけど私やすずかの家だとちょっと遠いのよね、な  
のはの家でも良いんだけどせっかくだから伸樹の家が良いと思うん  
だけど、どうー！」



いや何がせつかくなんだ。  
てか勝手に決めんな！

そう俺は抗議の声を挙げようとした。異議あり！

「賛成なの！」

「あ、私も行ってみたいな」

駄目でした。

そんな訳で、結局俺の家でやることになった。

いやまあ、ずるか嬢やアリサ嬢の家より近いんだろっけどさ。

何か釈然としねえ……。

その後は時間も時間だったのでその場はお開きとなった。

そして放課後、俺達はバスに乗っていた。

何故かと言うと、言わずもがな。俺の家に行くためだ。

バスに乗り四つ程バス停を過ぎ、目的のバス停にそろそろ到着する。

「へえ〜、伸樹の家って此方の方なんだ」

「こっつて……」

「ああ、次の停車場で降りるぞ」

俺がそう言うと、車内アナウンスが流れた。

『次は海鳴自然公園前です、バスを御降りのさいは足下に注意して御降りください』

そしてゆつくりと速度をおとしバスは停車した。  
先にバスから降り三人を待つ。

三人が降りて来たのを確認し歩き始める。

「俺の家はこっちだ」

そう言っただけは家に向かう。

歩いて約五分。俺の家に到着した。

「ここが俺の……て言うかうちの祖母の家だよ」

「わぁー、素敵なお家なの！」

「まあ、なかなか良い家じゃない」

「ふふ、可愛い感じだね」

若干一名素直じゃない感想が有ったが、まあ良いだろう。

赤い屋根の庭付き一戸建ての4LDKだ。頑張ったな爺ちゃん。

そう言えば忘れてたが、祖母は母方の祖母だ。

名前は菊咲明、だから俺とは姓は違う。

まあそんな訳で家に入ることにした。

「婆ちゃん、ただいま」

玄関の鍵を開け帰って来た事を告げる。

すると奥から返事をしながら祖母が出てきた。

「あらあら、おかえりなさい伸君。あら？そちらのお嬢さん達は？」

「ああ、同級生の娘だよ。えっと…」

俺が紹介をしようとして三人を見ると、自分達で順番に自己紹介をしはじめた。

「私、高町なのはです!」

「アリサ・バニングスです」

「月村すずかです」

「三人は同じクラスなんだ。俺とはクラスは違うんだけどね」

俺がそう説明すると、祖母は楽しそうに言った。

「あああら、よく来たわね。ささ、上がってちょうだいな。今お茶を入れてあげる」

そう言つと祖母はリビングに上がって行った。

さて俺達も上がりますかね。

「さあ、上がってくれ」

「「「お邪魔します」」」

そのお決まりの挨拶をして三人は入ってきた。

靴を脱ぎ、玄関から廊下を真っ直ぐ進みリビングのドアを開け中に入る。

俺はテーブルに着き直ぐ様靴から宿題を出す。

見ると三人は珍しい物を見るように、あっちこっちを見回していた。

初めて入る家だから気になのは判るが遊びに来たわけではないだろうに。

「ほら三人とも、宿題をやるんだろ？部屋を見るのは後でもできるんだから、早く宿題やるぞ」

俺がそう言うとハツと我に帰ったようにテーブルに着き始める三人。

「じゃはは……」

「べ、別に忘れてないわよ」

「あはは……」

まったく、仕方ないな。

そう思いながらもドリルを開き始めた三人を見て俺も宿題を始める事にした。

宿題を始めて15分、祖母が煎れてくれた紅茶を飲みながら解き続け、俺は最後の問題を今解き終わった。

背を伸ばし深呼吸をした。

そして三人を見るとまだ一生懸命解いている。

祖母は紅茶を煎れると邪魔をしては悪いと言って二階に上がってしまった。

「えっと……324÷4だから……81ね」

「うむ、アリサは普通の計算問題だな。答えも正解だ。」

「えっと……リンゴが八個でミカンが五個だから……800円 + 50円だよな。それで……」

「なのは文章問題か。……てか一個100円のリンゴって高くないか？」

「 $84 \div 6 + 5$ ……うん、答えは19ね」

「どうやらすずかは複合問題か。うん、先に割り算を計算したんだな、正しい。」

「とそんな感じで三人を。見ていると、不意にダイニングのドアを引っ掻く音がし、その後に鳴き声があった。」

「にゃ〜」

「どうやらアイツが来たらしい。」

「あれ？いま猫の鳴き声しなかった？」

「うん、私も聞こえたけど」

「伸樹君、猫飼ってるの？」

「まあ俺は宿題終わってるし入れてやるか。」

「ああ、飼ってると言っつかいつの間にか住み着いたと言っか」

本当にそうなんだ、三年ぐらい前に海鳴自然公園で見つけてから、気がついたら此処に住み着いていたのだ。

「にゃ〜〜（早く開けてくれ）」

「おっと、すまんすまん」

そして何故かその時、俺は動物の言葉が判ると言う不思議な能力を開眼した。猫だけでなく他の動物とも話せるのだ。実際に動物園に行つて試したからな！

いや、まったくもつて訳が判らん。

俺はその能力を勝手に『animal language talker（獣語翻訳能力）』と呼んでいる。

はいそこ！厨二病乙とか言つな！

まあとにかく、この能力は便利だ。

動物とコミュニケーションが取れるから道に迷つても動物に道を聴けるのだ。……まあ難点は動物が人間の感覚を判らないから教えられてもなかなか理解できない所かな。

まあ賢い奴はちゃんと説明してくれるけど。

でも何より、俺は動物が好きだから動物と話せるのは楽しい。

まさに俺のための能力だ！！

おっと、熱弁しすぎだな。

そしてなんと俺の言葉も相手である動物に伝わるのだ！  
もちろんON・OFFの切り替えも出来る。

リビングのドアを開け入ってきた猫を抱き上げる。

「にゃ〜〜（帰ってたのかい相棒）」

「ああ、…紹介するよ。我が家の居候、フィリップだ」

俺がそう言った瞬間、何故かその場が一瞬静まった。

「「「…え？」」」

「うん？」

何だ？どうしたんだ三人とも？

三人が驚いている理由が判らず、頭に疑問符を浮かべながら黙っている。次の瞬間、三人の叫びが部屋中に響いた。

「「「ええええ〜！？」」」

うおう！？ビックリした！？

何だよ、何がそんなに驚いたんだ？

なのはを見ると、何故か顔を赤くしながらわたわたしていた。

「えっ！？だつて、え！？嘘！？」

「ちょっと、フィリップってあのなのはが言ってたフィリップ？」

うん？なのはが言ってたフィリップって何の事だアリサ嬢？

「あっ！じゃあなのはちゃんと言ってたあの時の男の子ってもしかして！」

「「伸樹（君）?!」「」

な、何だ？俺がどうしたんだ？

あーもう、判らん！

誰でもいい、判るように説明してくれ!!

それから三人が落ち着くまでに暫く時間を有し。

そこからちゃんと話を聞くまでにまた時間を有した。

つづく



## 第五話なのだろうか？（後書き）

さて、毎度の如くこんにちは又は又は今晚は、グルタミンです！

さて今回で前回の過去回と繋がりました、さてここからやっと話が展開して行きます。

さて次回はどうしようか。

まあ作者なりには考えておりますが……。

あんまり自信は有りませんね、はい。

まあでも、まだ原作の話しも始まっていません。

でも後少して始まると思います。

どうか、この駄文と作者を暖かくて見守って下さい。

よろしくお願いします。

さて、そんな感じでそろそろおいとましたいと思います。

貴重なご意見・ご感想又はご指摘・誤字報告などなど、お待ちしております。

ではでは、また次回お会いしましょう！アデュー！

第六話なのだろうか？（前書き）

こんにちは、お久しぶりです！ずいぶん遅くなりましたが更新です！

いや、話が遅々と進まないです。

この次は高町家とエンカウンとですが、その次位からはもっと速く進めたいと思います。

長くなりましたが、ではどうぞ。

## 第六話なのだろうか？

「それでは先生からの連絡は以上になります。」

先生の言葉で帰りの会（SHR）が終る。

日直の号令により帰りの挨拶を済ませ放課後となった。

授業も終わったので荷物を纏めて、席を立ち帰ろうとしたその時だった。

「あ、いた、伸樹くん！」

最近仲良くなった、……いや、為らざるおえなかった少女の声が聞こえた。

もう諦めてはいるが、何故こうなったのか……。呼ばれてしまったのは仕方がないと、自分を呼んだ少女の下へ行く。そこには笑顔で待っているのはさんがいらっしやいました。

「伸樹君！一緒に帰ろう！」

その纯真無垢な笑顔で言うのはさんを見てむず痒さを感じた反面、遣る瀬無さも感じた。

S i e d なのは

最初にその男の子を見た時は、何か懐かしさの様なモノを感じました。

きつかけはアリサちゃんとの喧嘩で、すずかちゃんが止めてくれた後、すずかちゃんに話を聞いてその男の子の事を知りました。

私とアリサちゃんが喧嘩を始めて、止めなくちゃと思ったすずかちゃんが、助けを求めて偶々通った男の子、伸樹君に言われた事を教えてくれました。

『泣きそうな顔で訴えるんじゃない、ちゃんと言葉にしろよ。人は万能じゃない、言葉にして想いを伝えないと判らないよ?』

『さらに言えば、君はまだ彼女達に伝えていないだろ?自分の気持ちを、自分の言葉で』

その言葉を聞いた時私は、小さい頃ある男の子に言われた言葉を思い出しました。

それは、三年前の事でした。

まだ幼く物心付いたばかりの頃の出来事ですが、今でもその事はハッキリと覚えています。

私の家は5人家族で、お父さんにお母さん、お兄ちゃんとお姉ちゃんがいいます。

お母さんはケーキやお菓子を造るお店をやっています。名前は『翠屋』です。

今はお父さんと一緒にお店をやっていますが、三年前までお父さんは別の仕事をしてました。

その別の仕事での事故で大怪我を負ったお父さんは、知り合いの先生のいる病院に入院して、集中治療室に入っていました。

お父さんが入院してからは、幼い私でも判るくらいに家の雰囲気は重く暗くなりました。

時々哀しそうな顔を見せるお母さん。

お母さんを手伝っていたお兄ちゃんとお姉ちゃんですが、二人の雰囲気も暗い物がありました。

特にお兄ちゃんは、自分で何も出来ないもどかしさと、その自分に対する苛立ちでいつもピリピリした雰囲気で鍛練に明け暮れてました。

私は、そんなお兄ちゃんが恐くてあまり近づけませんでしたが、別に暴力とか振るわれていません。お兄ちゃんは、とっても優しいお兄ちゃんです。

でも、あの頃は私はまだ幼く手伝える事ありませんでした。

そんな私を気遣ってか、お母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも、皆優しく『なのはは何もなくていいよ、だから良い子にしててね』って言うてくれました。

でもそれは、幼い私にとって優しさにとらえることができませんでした。

まるで、側に居ると邪魔だと、お前なんか要らないと言われていくような、そんな風を感じていました。

だから、皆の言うような『良い子』を必死に演じました。

我が儘を言わず、笑顔で黙っていて、一歩離れた所でおとなしくしている、そんな『良い子』を。

でも、それも長く続けるうちに私は段々何もできなくなりました。家族の前では笑顔でいました。でも一人になると、途端に喪失感と一人と言う寂しさに押し潰されそうになりました。

時には人の居ない公園なんかで一人泣いていました。

そう、あの日も皆の邪魔にならないように一人で公園に行きました。

暗い重い気持ちを抱ながら、日の当たらない木の影にあるベンチに一人座っていました。

頭の中は皆の事ばかり。そして私は要らない子なんだと、居ないほうがいいんだと、そんな事ばかりが頭の中に浮かんでは消えていきます。

どうすればいいのか判らなくて、寂しくて悲しくて、また泣き出しそうになるのを堪えていた、その時でした。下を向いていた私の前に、猫さんが現れました。

「にゃ〜〜」

一鳴きした猫さんは、ひよいと軽くジャンプして私の膝に乗りました。

そうしてまた一鳴きして、体を私に刷り寄せてきました。まるで泣いてる私に一人じゃないよと言っている様でした。

嬉しくなって私はその猫さんを撫でました。二三次撫でると猫さんは、私の膝から飛び降り前に駆けて行きました。

私は咄嗟に立ち上がり追いかけてようとしましたが、それを見てその場で動きを止めました。

そこには、虫籠と虫網を持った私と同じくらいの年の男の子が、足に刷り寄る猫さんを見て立っていました。

そっか、猫さんには友達がいたんだ……。

私は、また一人取り残された気持ちになりました。

すると、不意に男の子が私の方を向き目があいました。目があい暫く黙って見つめ合う状態で立っていました。

言葉が出ず、沈黙の中たたずんでいました。  
すると、その沈黙を破るように猫さんが鳴きました。

「にゃ〜〜」

「何だよフィリップ」

その猫さんの鳴き声に答えるように、男の子は猫さんを見て言いました。

するとまた猫さんが鳴きました。

「にゃ〜〜」

「おい、すまんがもう一度言ってくれ」

「にゃ〜〜、にゃ〜〜」

猫さんと男の子のそのやり取りが、何だか話をしているようで、何だかおかしくなって私は思わず話しかけていました。

「こんにちは、そのねこさんはあなたなの？」

「いやこいつは」「にゃ〜」「ちょっとまって」

男の子が何か言おうとした時に猫さんの鳴き声が重なり、その猫さんに男の子が止めるように言いました。

本当にお喋りしているみたいでした。

そして気を取り直したように男の子が言いました。

「えっと、こいつは家の猫じゃないんだ、さっき虫取してるときにあっただ」

「へえ、ねこさんのおなまえは？」

男の子がそう言うと、私は猫さんに言いました。

さっきから男の子が猫さんと話してるようで、私も出来るかなって思っで。

「にゃ〜、にゃ〜」

「いや、わからんだろフィリップ」

残念ですが私には判りませんでした。

でもやっぱりこの男の子は判っているようでした。

「？、ふいりつぶ？」

「あ、うん、コイツの名前だよ」

「そっか、こんにちはなの、ふいりつぶ」

「にゃ〜」

私の挨拶に答えてくれたみたいで嬉しくて、私はフィリップの頭を撫でました。

気持ち良さそうに目をつぶり体を刷り寄せてくるフィリップに、また私は嬉しくなりました。

すると、唐突に男の子が言いました。



「そう言えば、さつきベンチに座りながら暗い顔してたね」

「じゃ〜」

「くらいかお？」

幼い私は、男の子の言っている言葉の意味が判らず聞き返しました。

「さつき、座って下向いてたね？何か嫌なことあったの？」

「……………うん」

男の子の言葉を聞いて、私は今まで忘れていた寂しさと悲しみを思い出しまし、沈んだ声で返事をしました。

「そっか、何があったの？よかつたら教えてくれるかな？」

優しい話し方の男の子の言葉に、私は自然と話し始めていました。

「うん、あのね……………」

お父さんの事、家族の事。

そして私の気持ち。

次々に出る言葉を私は止める事なく話続けていました。

全てを話終り、その場を沈黙が包みます。

不意に、下を向いた私の頭の上に、何か暖かい物が乗りました。

見ると、男の子が優しい笑顔で私の事を見ていました。

私の頭に乗っているのは男の子の手でした。

「そっか、大変だったな」

そう言うのと、男の子は優しく私の頭を撫でました。

その瞬間、何とも言えない物が私の心から溢れ出しました。

辛くて、苦しくて、でもどうしようもなくて、ぶっつけよりの無い、置き場の無い私の気持ちを、初めて理解してくれた事が嬉しくて、私は泣きそうになりました。

「…ふえ」

駄目だ、泣いちゃ駄目だ！迷惑をかけちゃ駄目だ！

私は良い子じゃなくちゃいけないんだ！

泣いたらまた……一人になる。

そんな考えが私の心の中で私を押さえつけます。

そうだ、泣いちゃ駄目なんだ。泣いたら、迷惑をかけたら……嫌われちゃう。

私は泣くのを必死に堪えていました。

すると、男の子は突然私を抱きしめ、囁くように言いました。

「泣いていいんだ、甘えていいんだ。辛いときは辛いつて言っているんだ」

その言葉は、染み込むように私の心に入ってきました。

「…う……うあ……うあああああああ」

それからもう泣き続けました。

男の子は、私が泣き止むまで優しく抱きしめてくれました。

今思い出すと、少し恥ずかしいです…。  
暫く泣き続けたあと、やっと泣き止んだ私に男の子はいいました。

「大丈夫か？」

「……」

私は、恥ずかしさにうつ向きながら頷きました。  
すると男の子は言いました。

「なあ、今言ったきみのその気持ちを家族に話してみたらどうだ？」

「…きもち？」

「うん、そう」

「でも……」

私は戸惑いました。

もし私の気持ちを拒絶されたら、受け入れられなかったら……。

そんな気持ち私が私の心を縛り付けます。

「大丈夫だよ、怖いかもしれないけど勇気をだして言ってごらん、  
そしたら皆君の事判ってくれるよ」

「…でも」

判ってくれる。そう言う男の子の言葉に私の心がゆれます。  
でも勇気がわかない。もし拒絶されたら、嫌われたら。

どうしてもその考えが消えません。  
すると男の子は思い出したように言いました。

「そうだ、良いものをあげるよ」

そう言って取り出したのは、青いビー玉のように丸い石でした。  
青くて丸い、直径三センチくらいの綺麗な石。  
それを私の手をとって、その上に乗せました。

「これなあに？」

「これは特別な石さ、お守りだよ」

「おまもり？」

「うん、勇気がでるお守りさ、勇気が出ない時、勇気が欲しい時、  
この石を手にとって胸に当ててごらん、きっと勇気が出てくるよ」

「……ほんとう？」

「ああ、本当」

そう言って、優しい笑顔をする男の子に、いつのまにか私も笑顔  
になっていました。

「うん、ありがとうなの」

その後男の子は急に叫ぶと、急いで帰って行ってしまいました。  
まだ名前も聞いてなかったのに……。  
暫く男の子の帰った方を見つめていました。

ふと公園の時計を見るとお昼ご飯の時間だったので、私も帰る事にしました。

家に返り私は、男の子に貰ったその青い御守りを握りしめ、勇気をだしてお母さん達に私の気持ちを、想いを話しました。

その時の事は今でも覚えています。

私の話を聞いたお母さん達は、優しく私を抱きしめ謝ってくれました。

それから、少しずつ私にも家の事を手伝わせてくれるようになり、お兄ちゃんの雰囲気も柔らかくなりました。

あの時のあの男の子の言葉を信じて、自分の気持ちに向き合い勇気を出して本当によかったと思います。

あの日から私は、またあの男の子に会いたくて、よく海鳴自然公園に行くようになりました。

でもあの日以来、あの男の子が公園に来る事はありませんでした。

しかし、あれから三年の月日が経ち、私はもう会えないと思っていたその男の子に再開することができました。

なんと、それがあのすずかちゃんを勇気付けた伸樹君でした！

それが判ったのはつい先日でした。

お昼休みのお弁当の時に、伸樹君の家で宿題をやる約束をして、放課後に伸樹君の家に行きました。

伸樹君はお婆ちゃんと二人で暮らしているらしく、他に家族は居ませんでした。

リビングで宿題をやり始め、皆で黙々と問題を解いていました。すると、何かを引っ掻く音と猫の鳴き声がしました。

それを聞いた伸樹君は、直ぐにリビングのドアを開けて入ってきて

た猫さんを抱き上げました。

猫さんを抱き上げて私達の所まで来て言ったその言葉に、私は一瞬頭の中が真っ白になりました。

だって、それは

「ああ、…紹介するよ。我が家の居候、フィリップだ」

そう、あの時の猫さんだったの！

S i e d   E N D

S i e d   伸樹

今は帰りのバスの中、隣にはなのはさんがいます。

まあさつき一緒に帰ろうと誘われたのですが……あれ？なのはさん？あなた徒歩で返れますよね？何故バスでご帰宅なのでしょう？まあいいや、そんなことより今はこっちの方が問題だ。

まいった、困った事になった。

まさか三年前に海鳴自然公園で会った幼女がなのはさんだとは…

…。

くそう！三年前の自分を殴ってやりたい！！

しかしどうしようか、あの時壊れているとは言えデバイスコアをあげちゃったんだよね〜。

……本当にどうしようか？

本編始まるのは約二年後。ユーノが来ら確実にアレがデバイスコ

アだつてばれるだろうし……。

あー！！本当にどうしよう！！

親の形見だつて言つて誤魔化すか？いや無理だろうな。

「君」

拾つたものだつて事にするか？いや、あからさまに嘘だつてバレルな。普通そんなもん御守りだつて渡さないし。

今から返してもらうか？……いやいや、それこそないだろ？

あげたもん返せとか、どんだけ阿呆だよ。

「樹君」

まいった、実にまいった。

このままじゃ100%巻き込まれる。

何か手を打たなくちゃいけないとは思つけど……、どうすればいいんだ？

誰か！オラに知恵を分けてくれ！！

「伸樹君！！」

「うおう！？な、何？」

「もう！何？じゃないよ、さっきから話しかけてたのに」

「あつ……と、ごめん。で、何だっけ？」

「……もう。明日の話だよ、明日皆で遊ぼつってアリサちゃんとかちやんに話したんだけど、伸樹君は遊べる？」

さてどうしたものか、遊びに誘われたのだが……。  
悩みながらふと横を見た。

「……時間無いかな？」

うぐお！？そ、そんな悲しそうな顔で見ないでくれ！

俺のライフはもう0よ！！

く、くそう！

「あ、いや！大丈夫！時間はある！！」

「本当？よかったの！」

くお！？今度は一転して笑顔に、なんて眩しいんだ！！

しかし明日か、明日は土曜日で学校は休みだな。

なら午前中はデバイスの調整でも

「明日は土曜日だよな？だから早めに10時ぐらいから遊ぼうと思  
うんだけどいいかな？」

はい、計画が変わりました。明日は午前からの予定だそうです。

「ああ、うん。いいけど……どこで遊ぶんだ？」

「あ、えっとね、家で遊ぼうと思うの」

「家って……、なのはの家？」

「うん！そつだよ！」



なんと、高町家に行くことになりました。……………なんでさ？

何かやな予感がする。具体的に言うと目の前のツインテな少女の兄的な人と何か起こるような、そんな予感がする。

……………死亡フラグ？いやいや、洒落になってないし。あの人に絡まれたら本当に死ねるから！

い、嫌だな、行きたくないな……………。でも今更断る訳にいかないし、本当にどうしよう……………。

そんなこんなで、どうするのか一人考えていた俺なのだが、ふと視線を感じ隣を見るとなのはさんがこつちを見ていた。

な、何だ？俺何か変な事してたか？

「……………何？」

「ふえ！？な、何でもないの！」

そう言うとなのはさんは前を向いて固まった。

……………いったい何なんだろうか？まあいいや、そしてまたどうするか考え始めた時、到着のアナウンスが流れる。

たしかなのはさんはこの駐車場で降りるはずだよな？

そう思って隣を見ると、なのはさんはまだ固まっていた。

いやいや、降りんと不味いだろ？仕方ない、教えるか。

「なあ、このバス停だよな？降りるの」

「ふにゃ？あ、いけない!？」

そう言うとなのはさんは、慌てて出口に向かって行った。まったく、忙しい娘だな。

あ、そう言えば家がどこら辺か聞くの忘れた。

お？これはいけるんじゃないか？

家の場所が判らない、道が判らない、つまり行けない。無事死亡フラグ回避！

よし、行けそうだ！やったぞ、いま風は確実に俺に向いている！！

そう俺が一人喜んでいると、突然携帯が振動し始めた。

電話か？メールか？

携帯を取り出してみる。どうやらメールらしい。

携帯を開き見てみるとなのはさんだった。

さっき別れたばっかだよな。どうかしたのか？そしてメールを確認すると……。

『伸樹君、私の家知らなかったよね？だから明日はさすがちゃんやアリサちゃんと一緒に来てね！』

さっきまでの喜びは塵と消えた。綺麗サッパリと。

そして俺は頂垂れたまま家に帰った。

はあ、マジでどうしよう？

つづく

第六話なのだろうか？（後書き）

さて、今話はとうだったでしょうかね？

まあ話が進んでない上にはほほ閑話な感じですが。

まあ次では恭也あたりとバトラせてみたいと思います。まあギヤグバトルですが。

てな訳で今回はこの辺で、誤字脱字報告や感想をお待ちしています、ではまた。

第七話なのだろうか？（前書き）

お久しぶりです、数ヶ月ぶりの投稿です、はい。  
しかもその割には何だかな話に……。

もう何と言っていいやら……本当に申し訳ありません。

取りあえず本編をどうぞ。

あ、それと最後に少しアンケートを取りたいと思いますので。そ  
ちらもよろしくお願いします。

## 第七話なのだろうか？

私、崎月伸樹は只今とある道場にいます。そして、とある知り合いの兄上と剣（木刀）を持って対峙しているのです。……………方膝を付いた状態で。何ぜに？

「さあどうした！お前の力はそんなモノか！！」

「……………何でさ？」

そう、それは前日になのはさんと遊ぶ約束をしたことが切欠だった。

家を知らないと言う口実を、一通のメールと言うハイテク（死語）で舜殺してくれたなのはさんは、その後ワザワザ二人に連絡を入れてくれたらしく、今朝の九時四十分ごろアリサ嬢とすずか嬢が迎えに来てくれやがりましたよ、……………リムジンでな。

そして着いたなのはさんの実家兼家業である喫茶店（？） 『翠屋』

いや、良いお店ですね。なのはさんの実家でなければ……………。ここまで来てしまうと流石に逃げる事は出来ない。仕方がないのでアリサ嬢とすずか嬢の二人に続き入る事に。

「「こんにちは！」」

「……………こんにちは」

元気の良い二人に比べ俺は若干小さい声で言う。

すると、カウンターにいた若い男女が笑顔で話しかけて来た。

「やあ、よく来たね」

「あら、いらっしやい」

そう言つと若い男女の女の方が奥へ入つて行つてた。

「おや？君は……………」

そして、残つた男の方が俺に気付き話しかけて来た。

「あ、始めまして。高町さんの同級生の崎月伸樹です」

俺がそう言つと、男の人の目付きが変わつた。

「ほう、君が……………」

うん？なんだこの反応は……………。

俺がそう思つて男の人を見ると、誰かが横から声を掛けてきた。

「父さん、三番テーブルのお客様がコーヒー追加だつて」

うむ、目の前の男の人にとても良く似た男の子（？）が来た。

まあ俺の方が年下な訳だが……………。

「おお、恭也。わかった、すぐに用意しよう」

ふむ、こっちが恭也さんか……、いや待て、マジか？マジなのか？

何なんだ、この人達。若すぎだろ！恭也さんはまだ見た目的に解るとして、土郎さんは若すぎないか！？ぶっちゃけパツと見は兄弟位に見えたぞ！

うん？

……てことは、さっきの女の人って……桃子さん？

あ、有り得ね。あれで三児の母かよ……詐欺だ。

そんな感じでこの世の神秘にフリーズしていると。不意に声をかけられた。

「君が『伸樹君』か」

「え？あ、はあ、崎月伸樹ですが……」

その声の人物は恭也さんだった。

声をかけてきたまでは別にいいのだが、恭也さんは何故か黙って俺を見ている。

……な、何なんだろうか。俺なにかしたか？

見つめ会う事（強制的）数秒（体感時間約二分）。  
恭也さんが話始めた。

「君の事はなのはから聞いてるよ。あの時には世話になったらしいな、礼を言うよありがとう」

……あの時？いつたい何時……ああ、あの夏のね。

ぶつちやけこつちはなのはさんと判つてなくて声をかけるはめになつたのですが……とは口が裂けても言えない。

まあ取りあえず無難に返事を返す事に。

「いえ、そんなあの時は　　だが……はい」

返そうとして遮られた。

えっと……何でございましょう？

「それとこれとは話が別だ。伸樹君……俺と勝負しよう」

……はい、全く意図が判らない。いやおかしいだろ、何故そんな  
る？

全く持って話が見えてこない。てか『それとこれ』って何と何さ。  
そこをもっと詳しく説明してもらいたいのだが。

「お、お兄ちゃん！？何でそうなるの！」

全くなのはさんの言う通りだ、何故そうなる？二百字居ないで答  
えてくれ！

「なのは、これはなのはの事だが男同士の問題でもあるんだ。悪い  
が口を挟まないでくれ。……伸樹君、三年前になのはを元氣付けて  
くれた事はとても感謝している、ありがとう。でも、だからと言っ  
て簡単になのはを任せる訳にはいかない。悪いが弱い男になのはは



任せられない。だから、道場で俺と勝負してもらおう。勝つたらなのは君に任せる。だが、そう簡単には勝たせない。悪いが全力でやらせてもらう。だから、君も全力で来い!!!」

うお!?マジで二百字で答えたよこの人の!?てか俺の考えてる事やりやがった、あんたはエスパーか?

「にゃ!?な、何言ってるのお兄ちゃん!!!」

なのはさんは赤くなって戸惑ってるし。

いやいや、話が飛躍しすぎでしょ。

てか小学校一年で任せるもくそもないだろ!そんな話は早すぎじやボケ!!!

それと当の本人の問題以外の何物でもないから!!!

「いや、そんな」「それじゃあ道場に行こう」「……聞いてないよ」

恭也さんは俺の言葉を遮るように言うと、直ぐ様道場に向かって行った。

くっ、ちくしょう、俺の話を聞け!!!

そうしてお店を出て道場に向かった。

道場は中々に広く、掃除も行き届いていて綺麗だった。

「さあ、どれでも好きなものを選ぶといい」

そう言って恭也さんは壁に掛けてある木製の武器を見せてくれた。武士の情けなのか好きな武器を使わせてくれるようだ。

俺としては勝負事態を辞めてくれるのが一番有難いのだが……。

はい、無理ですよね。

そして俺は無難に普通の木刀を手に取った。

いや、て言うかな竹刀はまだ判る、短めの木刀も小太刀と言う意味では判る、実際に恭也さんは小太刀型を使うようだし。

まあ百歩譲って薙刀も有りだとしてよう……。だがな、このあからさまに力で叩き斬るような西洋剣の形をした木刀や鎌の形をした武器は誰が使っただ!?

「……えつと、恭也さん。これらの木刀(?)は……」

余りにも疑問だったので聞いてみた。

「ああ、それは先代の人達の中に使う人がいたらしい。まあ殆ど父さんのお遊びだけだね」

さいですか。そう思って呆れ顔で壁に掛かっているそれ等の木刀(?)を見てみると、恭也さんが試合の開始を告げてきた。

「それじゃあそろそろ始めようか。一番最初の攻撃は君に譲ろう、何処からでも斬りかかってこい」

そんな事を言ってくれました。ええ、完璧に格下扱いですよこの野郎。

いや、まあ格下なんですけどね。

運動は苦手ではない。まあ何故か転生してからは前より出きるようになったが。

だが、それでも無理だろ。何たって恭也さんはあの御神流の使い手だ、勝つどころか攻撃が当たるかどうか……。

ええい、考えてもしょうがない!最初から勝てる要素は無いんだ、ならば当たって碎けるだ!

そうだ、それに此処でカッコ悪い所を見せれば三人に呆れられるか幻滅されるはずだ！

そうすれば自然と俺と関わらないように成るかもしれない、そうすれば原作の話と言う名の死亡フラグを回避出来るかもしれない！

いよっしゃ！ヤル気出てきたぜ！！

「……………行きます！」

そうやって俺は恭也さんに突っ込んで行った。コテンパにやられるために。

「さあどうした！お前の力はそんなモノか！！」

恭也さんの声が道場に響く。

俺は方膝を着きながら木刀を杖にして身体を支えていた。

「……………何でさ？」

かれこれ10分ぐらい、打ち合いと言う名の一方的な暴力が続き、倒されては起き上がり、起き上がっては倒されてが続いていた。

それでも、最初は見えなかった恭也さんの斬激が今では見えるぐらいまでにはなっている。

だが如何せん見えても反応が追いつかずかわせないのだ。

うぐう、弱いつて辛い……………。

「っ……、こんなのって」

「……伸樹」

アリサ嬢とすずか嬢が心配そうな声をだしている。

はは、二人は優しいな……、でもこうなる前に止めて欲しかった。

「お兄ちゃん！もう辞めて！！こんなの勝負じゃない、酷いよ！」

ええ全く、おっしゃる通りですなのはさん。

なのはさんのフォローが入った。余りにも一方的過ぎて見てられないのだろう。

……ああ、これで死亡フラグ回避出来ると喜んでた10分前の自分を殴り倒してやりたい。

服で隠れて見えないだろうが、多分俺の身体は全身打撲の痕と痣でいっぱいだろう。

しかもさつき打たれた右脇腹が動こうとするとかなり痛い。

もしかしたら骨折かひび割れしてるかも……。

もうかなり体力も精神力も限界ギリギリだった。

と言うかよく今まで持ったもんだ。

息を荒げて何とか立ち上がるうとするが、足に力が入らない。

身体が自分の物では無いのではないかと思ってしまう程に重い。

そんな俺に、恭也さんはつまらなそうに言った。

「……ふん、なんだ本当に終わりなのか？とんだ期待はずれだな」

……………ブチン！！  
俺の中で何かが切れる音がした。

……………期待はずれ……………だと？

勝手に勝負を決めておいて、無理矢理勝負させて、それでポコポコにしたあげく期待はずれ？

「……………けんな」

「ん？何だ？」

「ふざけんな！！」

そう言つくと同時に俺は走り出していた。

そして、普段見えている光景とは違うその状態を不思議とは思わなかった。

見えるもの全体に硝子がひび割れるように走る黒い線。

そして所々にある線より大きな、大きさにばらつきのある黒い丸。

熱くなった頭で何故か此だけは冷静に理解していた、この線をなぞる様に木刀を降ればいいと。

木刀を降り被った俺の剣筋を、まるで何処に来るか判っているように小太刀で受けようと構える恭也さん。

だが俺は、そんな事は御構いなしに木刀を降る。

そして次の瞬間、俺の攻撃を防いだ小太刀が……………切れた。

「っ！！？？」

驚き一瞬動きが止まる恭也さん。  
だがその一瞬が命取りだ！！

その一瞬を付き俺は、勢いのまま恭也さんの右肩から左銅に走る黒い線を斬ろうと木刀を瞬時に降る。

肩に当たる！と言うその瞬間、突然来た第三者によって俺の攻撃は止められた。

後数ミリで当たると言う所で止められていた。

俺の攻撃を止めた人物を見る。そこには苦笑いを浮かべた土郎さんがいた。

「……………何故とめたんですか？」

「……………いや、済まないね。謝るからそんな怖い顔で睨まないでくれないかな」

そう言って、おどけるように笑う土郎さん。

その顔を見て少しずつ頭の中が冷静になり落ち着いてきた。

すると土郎さんは、今度は恭也さんの方を向いた。

そして次の瞬間、思いつきり恭也さんを殴り付けた。

……………え？何？

その場が滲と静まりかえる。

顔をおさえながら、よろよろと立ち上がる恭也さん。

そして、土郎さんが恭也さんに話し始めた。

「お前は何をやってるんだ恭也。無理矢理に連れてきて、一方的に痛め付けて、勝手に落胆して……。お前はこの永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術を体得する中でいったい何を学んできた？弱いものを虐めることか？自分の感情を弱者にぶつけることか？」

「……………」

士郎さんの言葉に黙ってうつ向きしてしまう恭也さん。  
何だか俺も動けないぞ。

「答える恭也！！！」

暫しの沈黙のあとに響いた士郎さんの怒声。

その場にいた全員が驚いただろう。格言う俺も驚いて肩がビクッてなった。

てか士郎さん怖！

「……………自分の大切な物を、……………大切な人を守るためです」

ユツクリとしかし確りと答えた恭也さん。

それに士郎さんが返すように言う。

「ならなぜこんな事をした。今回の事は決闘や試合には到底見えな  
い。あれじゃあ一方的な蹂躪だ、とてもじゃないが真面目な奴がやる  
事じゃないぞ」

「……………」

その士郎さんの言葉に、手を握りしめ顔をしかめてうつ向き恭也

さん。

「……周りを見てみる恭也」

土郎さんの言葉に恭也さんが顔を上げ、そして周りを見渡す。

木刀を杖にして何とか立っている俺。

そんな俺を心配そうな顔で見てるのはさん達。

そして土郎さんが話し始める。

「みたか？此がお前の招いた結果だ。恭也、お前の大切なモノが何かは知らない。だが、妹の恩人である友達を傷付けた拳げ句に周りを不安にさせた。此の何処に守られているモノがある？俺の目には守られているモノなど何も見えないぞ、いやむしろ逆だ。恭也、お前はいま愚かにも大切なモノを自分の手で傷付けたんだ」

「っ……！！」

何かに気が付いたのか、ハツとした表情の後には後悔が滲み出る表情を浮かべる恭也さん。

「判ったか恭也、此が力と言うモノの怖さだ。力と言うモノは恐ろしい。使い方を間違えば、守るはずが自分で傷付け壊してしまう、力とはそういうモノのなんだ。」

「……」

「今回は最悪の事態にはならなかったが……、次は無いぞ恭也」

「……はい」



士郎さんの言葉に、確りとした意思でもって返す恭也さん。さつきとは目付きが違う。

て言うか最悪の事態じゃないって……俺からすれば最悪の事態だつての！

もうフラフラだよ！今にもぶっ倒れそうだよコンチクショー！

そんな事を考えていると、話は終わったのか数秒の沈黙の後、士郎さんが俺の方を向いて苦笑いしながら言った。

「だいぶ待たせたかな、済まなかったね家の恭也が迷惑をかけてしまった。本当に申し訳ない」

そう言うつと、士郎さんはいきなり深く頭を下げた。

「え？」

突然の事でまた驚く俺。すると、いつの間に来たのか今度は恭也さんが謝罪をしてきた。

「俺の自分勝手な感情と行動で酷い事をしてしまった、悪かった。本当に済まない」

そう言うつと恭也さんも頭を下げた。

……え〜と、これはどうすれば？

どうすればいいのか判らず、とりあえず頭を上げてもらつ事にした。

「えっと、とりあえず頭を上げてください」

そう言ったのだが、何故かまた恭也さんに謝られた。

「……本当に済まない」

頭を上げてくれよ……うっ、ヤバイ……もう限界みたいだ……。

「も……もういい……です……から、せ……せめて……やす……ませ……」

そこまで言っただけは力尽きた。

膝から力が抜けガクンと身体が沈む。

腕も膝に力が入らなく支えられず倒れこんだ。

薄れ行く意識のなか、最後に見たのは慌てて駆け出す三人の姿だった。

そして、不覚にもそんな三人を見て思ってしまった、こんなのも悪くはないなど。

そんな事を考えながら、俺の意識は完全に暗転した。

目が醒めたのは翌日の日曜のお昼前だった。

そして、昨日の恭也さんとの勝負と言う名の虐待を思い出し、戦闘中に起きた不思議な現象を思い出し、一人布団の中で絶望した。

何で直死の魔眼を俺が使えるんだ？……何でさ？

## 第七話なのだろうか？（後書き）

今日は又は今晚は。お久しぶりです、グルタミンです。

新生活が始まって数ヶ月経ったこの頃いかがお過ごしでしょうか？

はい、私グルタミンは新たに学校が始まりかなり忙しい毎日です。  
なのでなかなか更新できなくて……はい、そうですね、言い訳で  
す、すいません。

てな訳で、こんな作者ですが長い目で生暖かく見守って頂けると  
有難いです（汗）。

さてさて、冒頭で述べた通りアンケートを取りたいと思います。

まず一つ目は主人公の能力についてですが、現段階で確定している  
モノの他に後三つ程付けたいと思います。

現段階で決まっているのは、今回出た直死の魔眼、動物言語翻訳  
能力、神の本棚、魅了&超鈍感スキル、以上の四つです。

なので他にどんな能力があれば面白くなるかアンケートを取りた  
いと思います。

戦闘に使えるような物以外にも、日常であれば面白い物も待つて  
ます。

二つ目は今後の展開についてですが、無印とstsはもう決まっ  
ているのですが、間のA・sがまだ迷っています。

どんな感じで迷っているのかと言いますと、以下の通りです。

?王道でなのは側で物語を進める。

?これまた王道ではやてファミリー側で物語を進める。

?いやいや、ここは虚を付いて独断一人ルートだろ!!

こんな感じですよ。以上の通り迷っております、どうか一つあなた様のご意見を頂きたいです。よろしくお願ひします。

アンケートは感想と共に、お勧めの能力と展開アンケートの番号を書いてください、よろしくお願ひします!!

さてさて、長く成りましたが今回の所はこの辺で。

ご意見ご感想、又は誤字脱字報告などもよろしくお願ひします!!

ではでは、何かと至らない作者ですが、今後ともお付き合ひのほど、よろしくお願ひします!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9865n/>

---

リリカルって.....マジで!?

2011年5月24日19時59分発行